市立大町山岳博物館／大町登山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会　共同企画展

**大町登山案内人組合創立100周年記念**

# 北アルプスの百年
# 瀬慎太郎と登山案内人たち

Since 1917

大正6年　昭和　平成

Omachi Mountain Guide & Rescue
**100th Anniversary**

市立 大町山岳博物館
OMACHI ALPINE MUSEUM

市立大町山岳博物館／大町登山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会　共同企画展
大町登山案内人組合創立100周年記念

## 北アルプスの百年

# 百瀬慎太郎と登山案内人たち

**会　　期**　2017（平成29）年8月5日（土）～11月26日（日）
※会期中の月曜日、祝日の翌日は休館。ただし、月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館。なお、8月は無休

**開館時間**　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

**会　　場**　市立大町山岳博物館 特別展示室

**観 覧 料**　大人400円　高校生300円　小・中学生200円
※常設展と共通、30名様以上の団体は各50円割引。そのほかの各種割引については窓口でお問い合わせください。

**共　　催**　市立大町山岳博物館　大町登山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会

### 企画展関連の催し

**オープニングセレモニー**

日　　時　8月5日（土）　午前9時～午前9時45分
会　　場　市立大町山岳博物館 玄関 ほか（雨天時：講堂・ホール ほか）

**ミュージアムトーク**

期　　日　8月5日（土）　9月17日（日）　10月7日（土）　11月3日（金・祝）
時　　間　各日とも 1回目・・・午前10時～　2回目・・・午後2時～
会　　場　市立大町山岳博物館 特別展示室（企画展会場）

表紙写真：登山者（左端）を送り出す百瀬慎太郎（左から 2 人目）と荷を担ぐ登山案内人たち〔昭和初期 對山館前にて〕【個人蔵】
裏表紙写真：学生登山者と登山案内人たちの出発風景（後列右から 5 人目は百瀬慎太郎）〔1918（大正 7）年頃　對山館前にて〕【個人蔵】

市立大町山岳博物館
OMACHI ALPINE MUSEUM

# 目　次

頁

開催にあたって …… 3
創立 100 周年に際して …… 4

展示解説
第１章　日本近代登山の幕開け
　近代登山以前までの大きな流れ …… 5
　明治期の登山事情 …… 6

第２章　大町登山案内人組合の誕生
　大正登山ブーム …… 7
　對山館と百瀬慎太郎 …… 9
　大町登山案内者組合と登山案内人群像 …… １３
　戦中・戦後、そして平成へ ―現在につながる思い― …… ２０

第３章　岳都おおまち
　岳のまち おおまち …… ２３
　大町市の自然・風景 …… ２４
　北アルプスの山岳観光 …… ２５

展示資料図版 …… ２８
展示資料目録 …… ３２
百瀬慎太郎・大町登山案内人組合 関係略年表 …… ３３
主要参考文献 …… ３７

## 凡　例

1　本書は、大町登山案内人組合創立100周年を記念し、2017（平成29）年８月５日から11月26日まで大町登山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会との共同企画展として市立大町山岳博物館において開催する「北アルプスの百年　百瀬慎太郎と登山案内人たち」の展示解説書である。

2　写真や図表等の図版に付した番号は、展示パネルや展示資料のキャプションプレートの番号と共通するが、必ずしも実際の展示順序を示すものではない。なお、撮影者・提供者等の明記がない写真や図表等の図版は全て当館撮影あるいは所蔵・作成による。なお、個人所蔵者については、個人情報保護の観点から全て個人蔵と表記した。

3　資料名称は原則として所蔵先の呼称によるが、一部統一を図るため変更した。

4　文中で引用した文章について、今日的にみると人権意識から不適切と思われる用語が一部あるが、歴史的文脈を尊重し、原文のまま掲載した。

5　会期中、企画展の内容については、展示替えを一部行う場合がある。

6　企画展の企画は、市立大町山岳博物館と大町登山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会による。本書の編集は同館学芸員・関悟志と同実行委員会事務局長・矢口拓（大町登山案内人組合員）が担当した。また、本書の執筆は関、矢口のほか、同館専門員・矢野孝雄、指導員・西田均、宮野典夫、学芸員・千葉悟志が担当した。
なお、本書ならびに企画展の解説については、当館元学芸員の故・峯村隆氏による詳細なる調査研究成果を基に企画・開催した2002(平成14)年度当館企画展『對山館と百瀬慎太郎 岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る』開催時の展示解説を用いて一部再編集したほか、同氏が主となり収集した文献等の資料や関係者への聞き取り内容等を参考にした。

# 開催にあたって

今年も夏山登山シーズンを迎え、信濃大町駅前では大きな登山用リュックを背負った登山者の姿を数多く目にするようになりました。現在、大町市内の数ある登山口をアプローチとして、全国さらには海外からも、大勢の皆さんが北アルプスでの山登りを楽しんでいます。

今から1世紀前、大正初期になると、鉄道網の発達など登山を取り巻く環境が整備され、北アルプスへの登山者が急激に増加しました。北アルプスへの登山口である信州・大町にも多くの登山者が訪れました。時代は、いわゆる大正登山ブームを迎えます。しかし、当時の登山はまだまだ危険を伴う野営により道筋を探しながらの探検的な登山が主でした。そのため、実際に登山を行うには、山の地理に精通し、山中での暮らしに熟達した案内人の存在が不可欠でした。

こうした時代の要請を敏感にとらえたのが、大町にかつてあった旅館・對山館（たいざんかん）の百瀬慎太郎（ももせしんたろう）（1892～1949年）でした。慎太郎が主唱し、1917（大正6）年に大町登山案内者組合（現大町登山案内人組合）が大町で設立されました。これは当時、急増していた登山者の要望に応えるとともに地元登山案内人の資質向上を目指してのことでした。

大町登山案内者組合は、我が国の近代登山における登山ガイドグループとして最初に組織された団体であり、その設立自体が画期的でした。こうした登山案内人の組織的な活動は、当時の登山者にとって、登山がより快適になるとともに、安全面でも大きな役割を果たすこととなりました。

現在もその活動は連綿と続けられ、所属メンバーはガイド以外にも、登山道を修復する登山環境の整備や、登山口や駅前での相談など遭難防止の面や、さらには救助隊員として救助に当たるなど、地域社会の振興につながる活動を展開されています。

本企画展では、同組合ゆかりの写真や品々を展示し、今年創立100周年を迎えた組合の足跡とその存在を全国に発信するとともに、大町市周辺山域の山の魅力をご紹介します。

グリーンシーズンから紅葉シーズンにかけての信州への観光の折に、また夏山・秋山シーズンの北アルプス登山の行き帰りの際にご高覧いただき、後立山連峰の麓、“岳（たけ）”のまち・大町市ならではの「山岳文化」にふれていただければ幸いです。

結びに、本展にあたり、多大なご協力と貴重なご教示を賜りました皆様方に、心より深く感謝申し上げます。

2017（平成29）年8月5日

**大町市長　牛越　徹**

**「山岳文化都市宣言」**

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする、四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育ってきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人とが共生する独自の山岳文化を形成してきました。

私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

21世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が求められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館開館50周年の節目にあたり、山岳博物館創設当時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる21世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人とが共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

2002（平成14）年3月15日　　大　町　市

# 創立 100 周年に際して

「山を想えば人恋し　人を想えば山恋し」と、山と人への想いを言葉に残した故・百瀬慎太郎が日本で初めてとなる登山ガイド組織「大町登山案内者組合」（現 大町登山案内人組合）を設立して、今年で 100 年の大きな節目を迎えました。

これもひとえに、山を愛する登山者の皆様、山小屋・行政機関など関係する多くの皆様、そして北アルプスの山々のおかげと、案内人一同、心より感謝しております。

一言に 100 年、と申しましても、1917（大正 6）年の創立から、多くの登山者をお迎えした時期を経て、案内人の減少から存続が危ぶまれたことなど、幾多の苦労があったと伝聞いたしておりますが、それを乗り越え、現在も三十余人の案内人が先人たちの山への想いを受け継ぎ、大町登山案内人組合で活動しています。

創立から 1 世紀の節目にあたり、大町市はじめ、多くの関係者の皆様と実行委員会を組織させていただき、北アルプスの玄関口であります、ここ「岳のまち」大町市から山岳文化を全国に発信できる機会を得ることが出来ました。当組合 100 年の歴史を通じて、多くの皆様に北アルプスと玄関口である信濃大町に、改めて心を寄せていただくことができましたなら幸いに存じます。

大町市は、槍ヶ岳へ続く裏銀座と表銀座、百名山である盟主・鹿島槍ヶ岳を含む後立山連峰、常念山脈の北端・餓鬼岳と唐沢岳など広大な山域と長い歴史と山岳文化を有する、まさに山のまちです。

そして、その麓で山に向き合う私たち案内人は、登山者を山々へ導くものであり、また登山道整備などで山を守るものであり、さらに遭難防止や救助活動などで山の人々を支えるものでありたいと、努めてまいりました。

この記念事業が、1 世紀にわたる歴史を振り返り、次の 100 年を見据え、山岳環境と山岳文化を後世に伝える新たな礎になることを願っております。

この場を借り、この 100 年を支えていただいたすべての皆様に心より改めて感謝申し上げます。

そして、案内人一同、次の 100 年へ向けて決意新たにしていることをご報告申し上げ、創立 100 周年に際してのご挨拶に代えさせていただきます。

2017（平成 29）年 8 月 5 日

**大町登山案内人組合創立 100 周年記念事業実行委員会**
**会長　狩野 正明**
**（大町登山案内人組合長）**

**「信州 山の日」　7月第4日曜日　※2017（平成29）年は7月23日**

長野県は、県土の約 8 割を森林が占める全国有数の森林県です。この森林を水源とする豊富な水は、本県はもとより下流域の都市部へもその恩恵をもたらしています。また、全国に 23 座ある 3,000m 峰のうち 15 座を有する日本一の山岳と固有の生き物たちの宝庫である高原には、県内外から毎年 70 万人を超える人たちが訪れるなど、山が与えてくれる様々な「恵み」は私たちの生活になくてはならない貴重な財産です。

長野県民共通の財産であり、貴重な資源である「山」に感謝し、「山の恵み」を将来にわたり持続的に享受していくため、県では長野県独自の「山の日」を制定します。

2014（平成26）年　長　野　県

**「山の日」 ―山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する―　8月11日**

国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律（平成 26 年法律第 43 号）が 2014( 平成 26) 年 5 月 30 日に公布され、「国民の祝日」として新たに「山の日」が設けられることになりました。

2016（平成28）年1月1日 施行　内　閣　府

# 近代登山以前までの大きな流れ

雄大な北アルプス。人は遠い昔からこの山々を麓から眺め、また、さまざまな目的のために山中に分け入り、登り続けてきました。ここでは、北アルプスと人とのかかわりについて、大町登山案内人組合の誕生にいたる、近代登山以前までの大きな流れをご紹介します。

## 先史時代　― 縄文時代の自然崇拝 ―

北アルプス山麓の住人たちが動物を狩り、魚を捕え、草木とその実などを採集して生を営んでいた時代、集落から西方の奥にそびえる高い北アルプスの山々は「神の聖座」として崇める信仰の対象であったとも考えられています。一方、北アルプスの前山や、東方の低くなだらかな山々は、生活の糧を得るための大切な場所でした。

上原遺跡の環状列石

大町市平の上原遺跡（長野県史跡）には、環状列石と呼ばれる縄文時代前期の遺構があります。ここは、約5,500年前の人々が、柱状の自然石を地上に立てて並べ、北アルプスの山々を神とあがめて祀った祭祀場跡とも考えられています。

## 古代・中世　― 立山信仰 ―

日本に仏教が伝わると、自然崇拝や呪術を行う信仰と重なり合って山岳信仰の新たな思想が生まれ、いくつかの山では修験者たちが修行を行うようになります。中世には、霊山として多くの修験者を集めた北アルプスの立山や白山などでは、修験者を迎える常住の僧徒が生まれ、一般の人びとによる参詣登山も行われるようになりました。

立山（雄山山頂 3,003m）

平安中期、立山の特異な風景によって、立山地獄の思想が成立しました。剱・立山連峰の山中で目の当たりにする風景が、仏教の経典で著された地獄の景観に見立てられたのでした。

## 近世　― 国境見分と森林資源保護・開発 ―

江戸時代になると、加賀藩が「奥山廻り御用」を強化しました。隣国への防備・戦略や藩有林の確保のため、北アルプスの大部分を「御縮山」として、一般者の入山を禁止します。信州においては、野口村大出からの立山詣でを目的とした入山は黙認されたといわれますが、明治維新にいたるまで北アルプスは閉ざされました。

針ノ木谷周辺のようす（北葛岳山頂より）

江戸時代前期まで、信州の杣は、黒部峡谷・高瀬渓谷周辺の山々に生育する良質な樹木を伐採して利用していました。とくに、野口村から篭川をさかのぼり、針ノ木谷へと下る北アルプス鞍部の針ノ木峠は杣たちにとって重要な山中の峠道で、ここを越えて黒部峡谷周辺へ出入りしていました。

## 明治時代　― 新たな目的による山登り ―

明治維新を境に、調査研究を行う学術登山や地形図作成の測量登山などがはじまります。さらに一部の人びとによって、スポーツやレクリエーションとしての登山も北アルプスで行われるようになりました。

# 明治期の登山事情

明治維新以降、学術・測量登山などが国内で本格的にはじまります。明治 10 年代初めからは、外国人を含む一部の人びとによって、遊びの要素を持ったスポーツ性やレクリエーションとしての山登り、いわゆる近代登山が日本アルプスなどで行われるようになります。近代登山は、それまでの仕事や信仰などのためでなく、山に登ること自体を目的としたものでした。

## 日本近代登山の幕開け

1877（明治 10）年に槍ヶ岳などへ登り「日本アルプス」を称えたことで知られるイギリス人のウィリアム・ガウランドは造幣寮に招かれた技師でした。一方、北アルプス山麓では 1883（明治 16）年、北安曇郡長の窪田畔夫と仁科学校長の渡邊敏らが白馬岳に登っています。

（左）『日本旅行案内』　B·H·チェンバレン、W·B·メイスン共編　ケリー&ウォルシュ社　1907（明治40）年刊行=第8版

この外国人向け旅行ガイドブックの初版で、飛騨山脈を称した呼称「日本のアルプス」が初めて活字にされました。

このガイドブックは、アーネスト・メイスン・サトウがイギリス駐日公使館時代に日本各地を旅行し、外国人向け旅行案内書『中部・北部日本旅行案内（後に日本旅行案内）』をＡ・Ｇ・Ｓ・ホースと編集して刊行したのが初版で、その後、第９版まで発行されました。

（右）志賀重昂著『日本風景論』
政教社 1895（明治 28）年刊行=第５版

志賀重昂は、日本の風景美の素晴らしさを論じた自著『日本風景論』で「登山の氣風を興作すべし」と説き、国内の近代登山興隆の気運を高めるひとつのきっかけを生み出しました。同書は、1894（明治 27）年の初版以降、好評を博して版を重ね、1903（明治 36）年の第 15 版まで刊行されました。

### 《コラム》　近代登山とアルピニズム

ヨーロッパで 19 世紀後半に興隆した「アルピニズム」とは、元来は「（アルプスにおける）近代登山」のことをさします。そのはじまりは、1854（安政元）年９月、イギリス人アルフレッド・ウィルスがヴェッターホルンに登ったことからとされます。それ以前にも 1786（天明６）年８月、フランス人医師ミッシェル=ガブリエル・パカールと猟師ジャック・バルマがフランスのシャモニ・モン・ブラン（シャモニ）からモンブラン（4,810m）に初登頂を果たしていますが、これはスイス人貴族で自然科学者のオラス=ベネディクト・ド・ソシュールが主導したもので、その目的は自身の学術的な調査登山のためでした。ソシュールはアルプスの峰々において、植物、地形・地質、気象、物理など各種の観測を行っており、当時、未踏峰であったモン・ブランの初登頂に対して懸賞金をつけていました。こうした点から、1786（天明６）年のモン・ブラン初登頂は科学調査登山（学術登山）に関わるもので、近代登山とは異なるといえます。ウィルスの登山は山に登ること自体を目的としたものであり、地元住民による狩猟や薬草・水晶採りといった生業、あるいは科学者や軍事的な調査研究などの業務を目的とした仕事にかかわるそれまでの登山とは一線を画すもので、これを近代登山としました。すなわち、仕事あるいは信仰などのためではなく、個人の自由な意思と行動にもとづき、登ること自体を楽しみ価値を見出す登山が近代登山です。そして、乗馬、ハンティング、フィッシング、ゴルフなどとともに、近代登山こそが紳士がたしなむスポーツであるという新しい価値観の提唱もあり、19 世紀後半にイギリスを中心としたヨーロッパの上流階級に近代登山が流行しました。

その後、19 世紀末にイギリス人登山家、Ａ・Ｆ・ママリー（1855 ～ 1895 年）が主唱した新登頂主義（アルプスにおける初登頂の時代が終焉しても、より困難な岩壁登攀による登頂に無限の領域があるとし、そこに純粋なスポーツ性を求める提唱と実践）は、ママリズムとして、アルピニズム、すなわちアルプスにおける近代登山の代表的な思潮となり、より困難な岩壁の登攀や積雪期の登山を追求する登山がアルプスの峰々で展開されていくようになります。

日本においても 19 世紀末の明治維新以後、近代登山がいわゆるお雇い・お抱え外国人などを通じて国内に移入され、日本人の中にも山登り自体を目的とした登山を楽しむ文化が次第に定着していきます。20 世紀初頭の大正末頃から、ママリズムの影響を強く受けて岩壁登攀や冬山登山を志向する旧制高等学校や大学の山岳部の学生などは、より困難な冬山や岩壁に挑むようになります。こうした国内の流れの中で、日本におけるアルピニズムというと、ママリズムを主体にしたもので、より高く、より困難な状況や形式による競技性や記録を主目的としたスポーツ志向の登山を追求する思想や精神性をさすようになっていきました。

しかしながら、現在までに、国内外にかかわらずアルピニズムの解釈は多様化しています。

※本稿は、「コラム「近代登山とアルピニズム」（関悟志著）当館編『山と人 北アルプスと人とのかかわり』（当館、2014）収録を一部改変し再掲しました

（関 悟志／市立大町山岳博物館 学芸員）

# 大正登山ブーム

大正時代になると、信仰や仕事ではなく、自由な意思と行動にもとづいて登ること自体を楽しみ価値を見出す登山、いわゆる近代登山が国内で隆盛となります。地形図の発行、鉄道など交通機関の発達や山小屋の建設、登山案内人組合の結成などが影響し合い、登山を取り巻く環境が整備され、北アルプスでは夏山登山者が急増し、いわゆる大正登山ブームを迎えます。

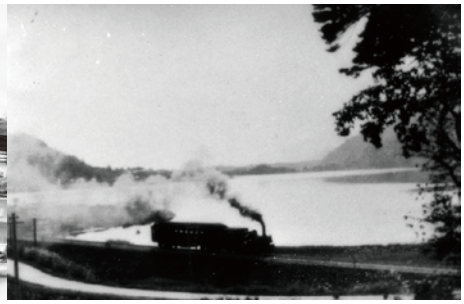
## 交通機関の発達　― 鉄道の整備 ―

大正時代には、大町地域周辺にも鉄道がつくられ、汽車が走るようになり、交通のようすが大きくかわりました。1915（大正４）年に松本・北松本間で開通した「信濃鉄道」は、北へ北へと線路をのばし、翌 1916（大正５）年には、大町まで開通しました。この地域初の鉄道は、地元住民はもちろん、遠方から北アルプスへやってくる登山者など、多くの人びとに歓迎されました。

それまでの乗り物といえば、人力車や乗合馬車などが主でしたが、その後、鉄道と、バスやタクシーといった乗合自動車を中心とした交通が発達しました。

客を乗せた人力車
【文化財センター複写保管】

乗合自動車の車庫
【文化財センター複写保管】



信濃鉄道の汽車
【文化財センター複写保管】

## 地形図の発行

数十年間の測量と製図作業をへて、1913（大正２）年から陸地測量部の北アルプス部分の５万分の１地形図が順次発売されました。それまでの地形図は同じ山でも地域によって呼び名が違ったり、山の並び順も定かでなかったりしました。大正初めに誕生した精度の高い地形図は安全な登山に大きな役割を果たし、大正年代に山登りが盛んになる要因のひとつはこうした地形図の発行にもありました。

また、地形図作成のための測量登山以外にも、同時期には森林境界確定や林相確認のための見分調査、地質図作成のための測量調査なども北アルプスなど国内の山岳地帯で実施されました。

陸地測量部発行
５万分の１地形図「鎗ヶ獄（やりがたけ）」
1915（大正４）年発行（部分）

三角測量の櫓（やぐら）　白馬岳山頂

1874（明治７）年に内務省に地理寮が設けられて以後、政府による地形図作りのための国内全土を対象とした本格的な三角測量が行われました。測量の基点に見通しのきく場所が選ばれ、土中に埋めた花崗岩製の標石のうえに木製の櫓を建て、計測器をすえて観測が行われました。

【個人蔵】

## 山小屋の開業

北アルプスでは、明治末・大正期から近代登山者向けの営業小屋が建てられて開業するようになりました。大正に入り、登山愛好者の増加につれて山小屋の建設も進められたことで、登山者の数はさらに増えていきました。山小屋によって登山がより快適になるとともに、安全面で大きな役割を果たすことになります。大正前期はまさに山小屋建設ラッシュの時代となり、北アルプスの主要な山岳や要所には次々と山小屋が建てられていきました。山小屋の建設とともに登山道の整備も進みました。

長野県設置石室（いしむろ）・二ノ俣（にのまた）石室
大正後期頃　【個人蔵】

## 学術登山から学校集団登山の普及へ

明治・大正初期、信州の教師たちの中に、当時盛んになりはじめた博物学の分野において、北アルプスなどの高山に自然科学のフィールドを求め、学術登山を行う人びとが現れました。同時に、博物学に通じた教師たちが自ら生徒を引率して、授業での遠足や学校集団登山を実践したことは、大正期以降の近代登山隆盛のひとつの要因となったとも考えられます。

高山での湖沼調査　1920（大正９）年
地理学者・田中阿歌麿（陸水学・湖沼学）による携帯式帆布製ボートを浮かべての白馬大池における湖沼調査の様子。池の端に天幕を張って３泊し、水深を計測するなどの湖沼調査を行いました。ボートなどの道具を山へ運び上げての調査であったため、多数の荷担ぎを必要としました。

学生登山者　1914（大正３）年
旧制大町中学校の学生たち。服装を見ると、学生服のほか着物などで、その上からキゴザ（着莫蓙）をまとっている者もいます。ミノ（蓑）や油紙とともに山での雨具や防寒具として使用されました。
【旧長野県大町高等学校蔵】

女性登山者　大正期頃　【個人蔵】

## 先鋭的な登山への挑戦 ― アルピニズム登山の展開 ―

大正末期頃から、より困難な岩壁登攀（とうはん）や積雪期登山を追求するアルピニズムを志向した山登りに挑む人びとがあらわれます。昭和 10 年代、北アルプスなど国内の高峰で、より困難な地点から目的地へ登るバリエーションルートによる登攀や積雪期の登頂がされつくされると、国内の登山家たちは海外に目を向けるようになっていきました。

八方尾根（はっぽう）にて　昭和初期頃
登山案内人・櫻井一雄旧蔵アルバムより
【個人蔵】

大沢（おおさわ）小屋にて　昭和初期頃
登山案内人・櫻井一雄旧蔵アルバムより
【個人蔵】

稜線のテント場にて　昭和初期頃
登山案内人・西澤彰旧蔵アルバムより

# 對山館と百瀬慎太郎

百瀬慎太郎は、大正期から昭和初期まで、信濃大町の旅館「今旅館」（通称・對山館）の主人として、北アルプスへ向かうため旅館に宿泊した登山者らに必要な物資を調達したり、大町登山案内者組合を設立（1917 年）して登山案内人を手配したりして、登山に関する利便や安全面でのサービスを提供しました。さらに、大沢小屋（1925 年建設）と針ノ木小屋（1930 年竣工）を開設して針ノ木岳周辺の登山環境整備を進め、この地域における近代登山の発展に貢献しました。一方、自身も登山を愛好する岳人であるとともに、短歌を詠み随筆を綴る文人でもありました。

## 旅館・對山館　― 誕生からその後 ―

百瀬慎太郎の生家は、江戸時代には問屋取次業を行っていたと伝えられます。これは、宿場町における旅客や荷物運送に携わる商いで、顧客と問屋の仲介業と思われます。しかし、1889（明治 22）年、百瀬家が居を構える八日町が周辺一帯を焼き尽くす大火に見舞われます。家屋敷の焼失をきっかけにして、1890（明治 23）年頃、祖父・新栄が旅館転業を決し、旅館の新築に着手しました。新築された旅館の建物は、間口 8 間（約 14.5m）・奥行 12 間（約 22m）、切妻白壁の総 3 階（一部 4 階）建で、完工までに数年を要したといいます。旅館は百瀬家の家印から、「今旅館」と称しました。

今旅館は、4 階の屋根裏まで吹き抜けで城郭の天守閣のように階段と回廊を配し、周囲のほかの家屋より頭抜けて高い建物であったため、階上にある部屋の軒からは北アルプスの雄大な景観を見渡すことができました。旅館はいつしか「對山館」が通り名となり、明治 30 年代後半から登山者の定宿としての評判が高まっていきました。大町には、ほかにもいくつか旅館がありましたが、商売抜きだったともいわれる慎太郎の登山者への細かな気配りがこうした評判を呼んだのでしょう。ただし、慎太郎の働きは、こと山に限ったもので、実質的な旅館経営は父・金吾が終生取り仕切りました。

戦時下の 1943（昭和 18）年、對山館は軍需工場とされた地元製造企業の寮となり、旅館を廃業。戦後からは個人医院となりました。

對山館　1941（昭和 16）年 7 月 15 日　【個人蔵】

對山館正面　昭和 10 年代推定　【個人蔵】

對山館　明治後期　【個人蔵】

現在確認されている對山館の建物が写った写真の中で、最も古い年代のものです。当時は木製の門柱で、1 階正面が格子戸であったこと、3 階軒下に篆書体風で書かれた「對山館」の扁額が掛けられていたことなどが分かります。また、客の乗降車待ちと思われる正面前に駐車された 2 台の人力車や、西隣の荒物屋の店先の雰囲気から、当時の八日町周辺の様子を垣間見ることができます。八日町界隈のにぎわいについては、戦前の話として、對山館の周辺に、味噌屋・荒物屋・下駄屋・菓子屋・肉屋・魚屋・八百屋・レコード店・食堂・茶屋・呉服屋など様々な業種の店が並んでいたといいます。

## 在りし日の對山館サロン ― 北アルプス近代登山における「對山館時代」―

かつて大町に存在した旅館・對山館。明治末・大正から昭和初期の北アルプス登山における中心地のひとつ大町にあって、その中心は對山館でした。当時、對山館は大町のみならず国内登山界で一時の輝きを放ちました。そして、對山館をひときわ輝かせたのが、旅館内にあった洋風の食堂の存在です。この食堂はさまざまな人びとが集まる自由闊達な空間であり、大町随一の文化サロン、最新の情報発信地として機能しました。

對山館の食堂風景　昭和初期　【個人蔵】

右から石川欣一（大阪毎日新聞記者・随筆家）、平林卓爾（對山館東の隣家「平」（家印）こと平林家の家人）、百瀬慎太郎、一人おいて小笠原勝（新聞記者）、桔梗英二、百瀬孝男（慎太郎の弟）。全員着物姿ですが、ペンを手に原稿用紙のような紙面に向かっている者、雑誌か本のようなものに目を落とす者、口を尖らせて何か言っているようにも見える者など、洋風のモダンな室内風景ともあいまって文化的で自由気ままな雰囲気が漂っています。

壁面に設置されたホームバー風の棚には、「キング・オブ・キングス」という銘柄のスコッチウイスキーのほか、リキュール類などの各種洋酒、カクテルシェイカーなどが並び、テーブルにはコーヒーカップやガラスコップ、洋皿やフォークなどが置かれています。部屋の隅に置かれた台の上には、ラッパ状の大型ホーン付きのラジオか蓄音機のような機材も据えられています。壁には洋風の額装が施された絵画などが掛けられ、天井からは洒落たシェードや鎖などの部品からなる洋風の電灯がさげられています。壁紙の残りが百瀬家に現存し、部屋の壁面にはピンク・青・白色からなる植物柄のイギリス製壁紙が貼られていたことが分かっています。

明治末から大正初期にかけて對山館を訪れた都会の登山者たちは、新しい文化と教養の香り、広い世界の知識で若き百瀬慎太郎を刺激しました。自らの北アルプス登山の実践と外からもたらされるものの独自の吸収によって、慎太郎は日本をはじめ海外の山岳界の動向にも通じた希有な存在となっていきました。大正から昭和初期、北アルプス北部をめざす登山者に、對山館と百瀬慎太郎の名は知れわたりました。

最盛期当時の對山館について、本場アルプスのアイガー東山稜初登攀などで知られる槇有恒は次のように述べています。槇は、戦後一時期、慎太郎の手引きで現在の大町市常盤泉に仮住まいし、慎太郎とは晩年まで親交が厚かった人物です。

*「スイスのツェルマットにホテル・モンテローザという古くて小さいが有名な旅館がある。十九世紀のアルプス登山黄金時代から登山者の集った歴史的な存在であるが、わが国アルプスの登山で同じような宿を求めるなら、大町の對山館であるといって言い過ぎではないであろう。」*

槇有恒著「思い出の日々」『わたしの山旅』（岩波書店、1968）

槇有恒（右）と百瀬慎太郎（左）　【個人蔵】
鹿島槍ヶ岳山頂にて　1947（昭和 22）年９月

また、槇は、登山者に対する慎太郎の業績を高く評価して次のようにも記しています。

*「（前略）近代的登山の潮の波頭に立って、登山者に與へられた恩恵は單に職業上然うであつたといふには余りに大きい蔭の力であつた。であるから私は此時代の一劃を對山舘時代と稱へても過言でないと思ふものである。」*

槇有恒著「慎太郎さんを憶ふ」『日本山岳会信濃支部報』第３号（日本山岳会信濃支部、1949）

## 百瀬慎太郎 ― 生いたちとあこがれ ―

幼くして隻眼となったことで百瀬慎太郎はずいぶん苦しみました。慎太郎の作歌や山岳活動の根源には、心にある傷の痛みを昇華させるための己との闘いがありつづけたのかもしれません。

7 歳頃の百瀬慎太郎
1900（明治 33）年頃
【個人蔵】

### 慎太郎の誕生

慎太郎(愼太郎とも。戸籍上の名前は真太郎)は 1892(明治 25)年 12 月 10 日、父・百瀬金吾、母・万世の長男として誕生しました。イギリス人宣教師のウォルター・ウェストンが初めて對山館を訪れた前年のことでした。金吾は穏やかで誠実な面倒見のよい人柄であり、静かに生け花などをたしなむ趣味人でもありました。大町六日町の松本藩典医・斎藤文穀の娘であった万世には漢文の素養があり、慎太郎は母の口ずさむ漢詩を耳にしながら育ちました。

慎太郎は穏やかな反面、友人が理不尽な目にあったと知るや上級生と渡り合うような気性の激しさを合わせもっていたといいます。

### 家業と夢の葛藤

2 歳の年、囲炉裏に落ちた慎太郎は鍋の湯をかぶって全身に熱傷を負います。やけどの名医といわれた伯父・斎藤謙一郎（母方の祖父・文穀の長男）の献身的な手当てと秘伝の膏薬により奇跡的に一命をとりとめたものの、右目は永遠に光を失いました。

大町中学校を卒業した慎太郎は、さらに上の学校へ進むことを望みましたが、長男であるがため許されず、不本意な心を残したまま家業に就きました。

若き歌人たち　1912（明治 45）年頃
短歌を同好する大町中学校時代の同級生たち。左から 20 歳頃の百瀬慎太郎、小松宗邦、腰原峯三。下、浅野賢三。
【個人蔵】

### 山への目覚め

1906（明治 39）年、大町中学 2 年の夏、慎太郎は友人とともに白馬岳に登りました。慎太郎にとって初めての北アルプス登山でした。山の虜となった慎太郎は 1909（明治 42）年、満 16 歳で日本山岳会へ入会（会員番号 215 番）、1911（明治 44）年（または 1910 年）10 月には、黒部の主こと遠山品右衛門とその長男・作十郎の案内で「悪絶険絶天下無比」といわれた針ノ木峠に立ち、新雪の中、黒部川の平まで往復しました。意にそまない宿屋家業に鬱屈した日々を送る慎太郎に、晩秋の針ノ木峠の荒涼とした風景は深い感銘を与えました。その後、山は慎太郎に、心の安寧と多くの友人をもたらすことになります。

登山中の百瀬慎太郎（左端）
燕岳にて　大正～昭和初期頃　【個人蔵】

登山中の百瀬慎太郎
湯俣付近にて
大正～昭和初期頃
奥は友人の武田豊美
【個人蔵】

遠山品右衛門　大正初期頃
若き慎太郎を初めて針ノ木峠へと案内した遠山品右衛門（本名･里吉）は、慎太郎が「仏心をもった山の主」と称した大出の猟師・釣師でした。

## 山に魅せられた慎太郎

百瀬慎太郎いわく、すでに物心つくまでには、眼前に日々迫り見る北アルプスの峰々に魅了され、心奪われていました。

*「一枚の障子を開けさへすれば、一歩門を出さへすれば、威圧する様に迫る北アルプスの連峰は物心の付く頃から、常に私をチャームして、私の全心を奪ってゐた。」*　百瀬慎太郎著「後立山連峰逆走記」（1913 年）

## 岳人・慎太郎

山に魅せられた慎太郎は、日本の近代登山黎明期から探検期と呼ばれる時期に、自身にその意図はなかったのでしょうが、自らも岳人として登山史に足跡を残しています。

- 1913（大正 2）年 7 ～ 8 月　蓮華岳～大黒岳縦走　※八峰キレットの鹿島槍ヶ岳方面からの初通過
- 1923（大正 12）年 3 月　名古屋の素封家・伊藤孝一、燕山荘の開設者・赤沼千尋らと雪の立山・針ノ木越え ※積雪期北アルプス北部横断行 4 番目の記録
- 1924（大正 13）年 4 月　槍ヶ岳～双六岳往復　※この区間の積雪期初縦走

## 慎太郎が建てた２つの山小屋

**大沢小屋**　1917（大正 6）年夏、篭川谷大沢出合対岸に石積み置き屋根の「大沢石室」ができました。これは慎太郎の小学生時代の校長であり、植物学者にして登山の普及にも熱心だった河野齢蔵が設計し、慎太郎への河野からの私信から推して、慎太郎が少なくとも場所の選定と経費見積りをして作られたものです。

大沢石室　大正期

1925（大正 14）年、慎太郎は石室の登山道をへだてたすぐ隣に木造の大沢小屋を建て、昭和初期まで両者は並存しました。

1921（大正 10）年に北アルプスに燕山荘を建てた赤沼千尋は当時、“山荘を建てることは山を冒瀆するもの”として山小屋を建てた自分を暗に非難する親友の慎太郎を再三誘惑してその気にさせたと記しています。事実、慎太郎は家族の反対を押し切って建てたのでしたが、なぜ石室と並存までして建てる決心をしたのでしょうか。一説に、厳冬期の針ノ木峠越えによる立山登山の失敗（1923 年 2 月、猛吹雪で大沢石室に 5 泊停滞、石室内の寒さや焚火の煙の充満に苦しめられ下山）の要因として、今後さかんになるだろう冬山登山の避難小屋として石室の機能失格を身をもって知ったからだといわれています。

初代大沢小屋　1925（大正 14）年頃　【個人蔵】

初代針ノ木小屋　1930（昭和 5）年頃

**針ノ木小屋**　1928（昭和 3）年 5 月、慎太郎は針ノ木峠の富山県側に小屋を建てようと富山営林署を訪ねました。これは前年末に冬の篭川谷でおきた早稲田大学山岳部雪崩遭難への対処で大沢小屋が大いに役立ち、登山基地・避難場所として、山小屋の必要性を再認識したためだといいます。

富山営林署は「国有林はみだりに借地の許可をしないのが原則である」と取り付く島もありませんでしたが、山を通じた友人・石川欣一親子の助言と働きかけがあり、1929（昭和 4）年 1 月、借地願が認可され、9 月に整地工事完了。1930（昭和 5）年 7 月、木造平屋建て間口 3 間奥行き 4 間の針ノ木小屋を竣工するにいたりました。

人とのつながりの妙を示す、峠小屋こと針ノ木小屋の完成までの顛末です。

針ノ木小屋の建設許可に一役買った石川欣一は、当時、「最もスマートな山男」といわれ、米国の名門プリンストン大学留学中に大阪毎日新聞に入社し、海外の特派員や支局長などを歴任。随筆家としても知られ、その軽妙洒脱な山の随筆は、信州大町と敬愛する「慎太郎さん」のことで満ち満ちています。　【個人蔵】

# 大町登山案内者組合と登山案内人群像

大町登山案内者組合（現 大町登山案内人組合）は 1917（大正6）年6月、百瀬慎太郎が主唱して大町で設立されました。これは当時、増加する登山者の要望に応えるとともに地元の登山案内人の資質向上を目指してのことで、こうした動きは全国に先駆けてのことでした。

## 大町登山案内者組合の結成 ― 登山ガイドグループの先駆け ―

大町登山案内者組合は結成の 1917（大正６）年から 1943（昭和 18）年の旅館・對山館廃業頃まで、事務所を對山館内に置きました。結成当初の組合の性質は、百瀬慎太郎いわく“山に通じた人間達の「隣りづきあい」といったもの”であったといいます。

ここでいう組合とは、同職業者の集団という意味合いであり、大町登山案内者組合は、我が国の近代登山における山岳ガイドグループとして最初に組織された団体であり、その設立自体が画期的でした。すなわち、富士山、立山、白山などといった霊峰で登拝者を先導したり、場合によっては登拝者の荷を一部背負いながら先導・引率したりした、先達、中語、御師、強力などと呼ばれた同行者たちの集団とは一線を隔すものであったといえます。

学生登山者と登山案内人たちの出発風景
1918（大正７）年頃　對山館前にて　【個人蔵】
後列右から５人目は百瀬慎太郎

## 登山案内人組合誕生の舞台裏

登山者（左端）を送り出す百瀬慎太郎（左から２人目）と荷を担ぐ登山案内人たち
昭和初期 對山館前にて　【個人蔵】

大町登山案内者組合の設立以前から、当然ながら慎太郎は對山館の宿泊者に乞われれば、登山支度を調達するとともに信頼に足る登山案内人を紹介していました。これは對山館には父・金吾から続く案内人紹介の実績があり、慎太郎自身も案内人たちと山行を共にし、その力量を把握していたということです。

大正時代に入って登山に関わる諸環境が整いはじめると登山者は増加し、登山案内人の需要も高まりました。しかし、北アルプス北部周辺の山域を網羅する案内能力が備わった大町の案内人は限られており、もはやその需要と供給の均衡はくずれ、慎太郎は案内人の人員確保と彼らの案内能力向上の必要性が急務であると感じていたものと思われます。

*「眼が覺めると、對山館の廣い二階も階下も、立ち動く登山者と人夫とで一ぱいになつてゐるのを見た。そのあひだを、若い主人とその弟*（百瀬慎太郎と弟の孝男）*とは、忙しく動き廻つてゐた。*
*祭*（大町の若一王子神社の夏祭り）*の爲に人夫が出なかつたので、逗留してゐた客もあると聞いた。今日も人夫が不足で、後からの申込の客は、逗留するほかはないと聞いた。」*

窪田空穂著「大町より濁澤へ」『日本アルプス縦走記』（1923 年）
『日本アルプスへ 日本アルプス縦走記』（1934、郷土研究社）

### 《コラム》　幻の“登山案内者手帖”、慎太郎が定めた“規約・心得”の実際とは・・・

明治末から大正初期に発行された数号にわたる日本山岳会会報『山岳』誌上には、小島烏水による「登山の導者養成に就きて」と題した一文が掲載されて以降、職業としての山岳ガイド養成に関する数編の文章が寄せられていて、その気運が徐々に高まっていく様を伺い知ることができます。その中では、ヨーロッパの本場アルプスにおける山岳ガイドの実例が比較紹介され、国内の現状改善に関する対策などが言及されています。例えば、登山案内人の資質や料金に関するトラブルを改善する一案として、本場アルプスにならい「登山案内者手帖」を作製し、案内人に無料配布する事業案が示されていますが、実現にはいたらなかったようです。

また、百瀬慎太郎の私信を掲載する形で、大町での登山案内人養成についても同誌上に数回寄稿されており、1917（大正６）年夏から大町で慎太郎が大町登山案内者組合を設立したことが初めて紹介されています。さらに、18 項目からなる大町登山案内者組合の「規約」（1917 年６月）も掲載されました。しかし、これは慎太郎による試行的な部分が含まれる素案であったようで、当時の一般的な事柄をいったものであったといいます。さらに、13 項目からなる同組合の「心得」も記されています。この「心得」は慎太郎いわく、組合の会合の席で加入者に口頭で注意したような事柄であり、「公表すべきものではなく、たゞ我々同志の誡め」であるとしています。

*「心得としては　一、案内者強力は純朴にして善良なる山人の氣風を重んじ、不徳義の行爲あるまじき事。*

*一、登山者に對しては出來得る限り親切丁寧を旨として其意志に背かず、總ての勞務に忠實なるべき事。*

*一、規定の賃金以上の暴利を貪らざる事。（中略）一、善良なる大町案内者の名實を擧ぐる樣心懸くべき事。*

*／百瀬慎太郎」*　　【「雑録 登山案内者（一）大町登山案内者組合」『山岳 第十三年第一號』（日本山岳會事務所、1918）】

（関 悟志／市立大町山岳博物館 学芸員）

### 《コラム》　山人と初期の登山案内人　― 山の知恵の継承 ―

大町登山案内者組合設立時に中核となった加入者は、明治末期からの森林調査登山や測量登山に同行した経歴をもつ地元大町の猟師ら若干名でした。そのほかの加入者はおもに農業を営む大町在住者であり、中核となった猟師らに連れられて猟を手伝ったり測量登山で荷物を担いだりした経験を通じて山を知った人が大半だったと思われます。例えば、設立時からの加入者である黒岩直吉と松澤由蔵は、組合の中核のひとりであった猟師・伊藤菊十と親交があり、誘われて組合に参加したといいます。また、設立直後に加入し 1958（昭和 33）年頃まで登山案内を重ねた櫻井一雄は、猟師・伴五郎（本名・長作か）を祖父にもち、山に詳しい叔父の郡三郎から山を教わって登山案内人になったといいます。このように大町における初期の登山案内人のなかには、山人と共に山を歩くことではじめて山を覚えたという人たちも少なくなかったと考えられます。

では一体、山人自身はどのようにして山を覚えたのでしょうか。かつて山人が暮らした山の集落には、何世代にもわたって綿々と蓄積されてきた狩猟や杣仕事などに関する知識や技術が存在し、そうした“山の知恵”とも呼べる能力を次世代の山人たちも継承していたことはおおいに推察できます。

※本稿は、関悟志著「コラム①　山人と初期の登山案内人 ―山の知恵の継承―」当館編『北アルプス 山人たちの系譜 ―嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景―』（当館、2007）収録を一部改変し再掲しました

（関 悟志／市立大町山岳博物館 学芸員）

**黒部峡谷・立山連峰周辺での森林調査登山（推定）**　明治末期頃推定　【個人蔵】

一行の後方にある立札には「黒部及立山國有林踏査之途上」と書かれており、明治以降、国有林として黒部奥山を管理することになった営林署職員や同行者らによる林相確認や県境査定といった森林調査のための登山時の集合写真と推定されます。総勢 50 人ほどが写っていますが、服装や装備の様子から、うち 30 人ほどが荷担ぎあるいは案内人と判り、彼らの多くは地元の山に通じた山人であったと思われます。こうした山人たちの中には、初期の登山案内人として活動した者もいました。

## 初期の登山案内人プロフィール

組合設立時、加入者として名を連ねたのは次の22名でした。※人名の読み方が判明・判断できない部分については読み仮名を付していません。

伊藤菊十、大西又吉、勝野玉作、傳刀林蔵、黒岩直吉、松澤由蔵、佐藤静馬、松田茂一、吉澤永次郎、北澤清志、北澤儀一、宮坂廣次、北澤定治、西澤浅一、神社栄太郎、宮坂義衛、柳澤國夫、福島今朝吉、西澤彰、平林廣恵、鎌倉澄治、宮坂良助。

参考までに、大町登山案内者組合結成時の主な登山案内人たちについて、設立当時、百瀬慎太郎が彼ら7人衆を評した形容を拾い集めたのでご紹介します。

- 伊藤菊十「*大町の案内人としての元祖*」「*猟夫育ちとして数十年山に経験有*」
- 大西又吉「*大町の山案内人としての元祖*」「*大町に於ける一流*」「*経験豊か*」「*山の「勘」のよい事は第一位です。体格はもと土地の村相撲の大関で大砲*（明治期の大相撲力士で長身の横綱）*の様な面つきです*」
- 勝野玉作「*大町の山案内人としての元祖*」「*大町に於ける一流*」「*精悍という方です。強情で進んで帰ることを知らぬという勇者です*」
- 傳刀林蔵「*大町の山案内人としての元祖*」「*大町に於ける一流*」「*沈着*」「*比較的思慮深く落付きがあります*」「*極度の慎重さと強い責任感*」
- 黒岩直吉「*大町に於ける一流*」「*勇気*」「*将来ある*」
- 佐藤静馬「*大町に於ける一流*」「*徹頭徹尾忠実にして剛力*」
- 松澤由蔵「*準一流*」「*其無邪気と元気は雇傭者に快感を与ふべしと想像致候*」

このほか戦後活躍した主な登山案内人たちには大和由松、櫻井一雄、平林高吉、勝山佐久衛、櫻井親次らが知られています。

登山案内人・大西又吉（後列左から３人目）
黒部・立山周辺での森林調査登山にて（推定）
明治末期頃推定　《写真は部分》
後列左から２人目は百瀬慎太郎　【個人蔵】

登山案内人・傳刀林蔵（左端）、勝野玉作（右端）
1916（大正５）年推定
中央は百瀬慎太郎と交友があった山好きのロシア人商人アレキサンドル･グーセフ（当時、横浜在住）と思われる　【個人蔵】

登山案内人・北澤定治
1921(大正10) 年【個人蔵】

登山案内人・西澤彰（左から２人目。後に姓・倉科）
對山館前にて　大正末～昭和初期頃

登山案内人・黒岩直吉　針ノ木峠にて
1924（大正 13）年７月 20 日　黒田正夫撮影　【個人蔵】

（左から）登山案内人・鎌倉澄治、西澤春吉、西澤彰、麻生　一ノ越にて　大正末～昭和初期頃

（後列左から）登山案内人・細川悦蔵、宮坂義衛、松田茂一、最上　　薬師岳頂上にて　1923（大正 12）年８月２日　竹内鳳次郎撮影　　【個人蔵】

前列の女性２人は右から竹内ヒサ、ヒサの妹・岡田季

（前列左から４人目※）登山案内人・北澤清志、（後列左から）黒岩直吉、神社栄太郎　五色ヶ原にて　大正初期

前列の左端は伊藤孝一【個人蔵】　　※あるいは２人目か

登山案内人・大和由松（左）　昭和初期頃　【個人蔵】

当時めずらしい“スキーのできる登山案内人”で、岩場もたくみだった。出身地の大町市平から安曇野市穂高有明に移り住み、有明登山案内人組合の結成に携わります。

登山案内人・平林高吉（前列左端）　播隆窟にて

昭和 20 年代後半頃

櫻井一雄にさそわれて昭和初期頃に大町登山案内者組合に加入。戦後も昭和 30 年代頃まで案内を続け、多くの客を案内しました。

登山案内人・櫻井一雄（右）　針ノ木岳山頂にて　大正末～昭和初期頃　【個人蔵】

左は馴染み客の崎川幸雄。当時としては貴重な“スキーのできる登山案内人”で、多くの客から指名を受けました。懇意にしていた石川欣一からアメリカ土産としてもらったピッケル、ザック、登山靴を身に付けた姿は、当時の案内人仲間たちからすると異様に映り「洋行帰り」とあだ名されたことも。しかし、数年後には大町の案内人もほとんどが「洋行帰り」となったといいます。

## 登山案内人たちの活躍

大正・昭和初期、北アルプス後立山連峰周辺の山域における近代登山史に名を残す活躍をした大町の登山案内人たちもいました。この当時、彼らの案内によって成された初登頂や初登攀の記録から、主なものをご紹介します。

| 西暦（和暦） | 事　　柄 |
|---|---|
| 1915（大正4）年 | ７月、大町の案内人・傳刀林蔵、黒岩直吉ほか、理学博士・一戸直蔵、大阪朝日新聞記者・長谷川如是閑、俳人・河東碧梧桐の針ノ木峠～烏帽子岳～槍ヶ岳縦走（第２記録）を案内 |
| 1917（大正6）年 | ７月、大町の案内人・黒岩直吉、芦峅寺の案内人・佐伯政吉とともに、慶応義塾山岳会会員・斎藤新一郎の別山尾根～剱岳～大窓（三ノ窓～大窓間の初縦走）を案内 |
| 1918（大正7）年 | ７月、大町の案内人・佐藤静馬ほか、慶応義塾山岳会会員・伊東弥六、豊辺国臣の鹿島槍ヶ岳～八峰東面ほか縦走（初踏破・初下降）を案内<br>７月、大町の案内人・黒岩直吉ほか、慶応義塾山岳会会員・斎藤新一郎の鹿島槍ヶ岳～八峰キレット（稜通しの第２踏破）を案内 |
| 1919（大正8）年 | ８月、大町の案内人・佐藤静馬ほか、日本山岳会会員・沼井鐵太郎の五龍岳～黒部川東谷下降～棒小屋沢遡行などの登山を案内（八峰から東谷への踏破初記録） |
| 1920（大正9）年 | ７月、大町の案内人・伊藤菊十ほか、竹内鳳次郎、竹内ヒサの鹿島槍ヶ岳～針ノ木峠縦走を案内（女性によるこの間の初縦走）<br>７月、大町の案内人・大西又吉ほか、日本山岳会会員・田中喜左衛門、ほか１名の黒部川～上ノ廊下初踏破・初下降などを案内<br>７～８月、大町の案内人・北澤清志ほか、竹内鳳次郎、竹内ヒサ、岡田郁之助（ヒサの弟）の黒部横断などを案内（女性初の黒部横断・剱岳登頂） |
| 1930（昭和5）年 | ７月、大町・有明の案内人・大和由松、京都帝大旅行部部員・藤田喜衛、工樂英司のスバリ岳西面中尾根登攀（初登）・西尾根主稜登攀（初登）を案内<br>８月、大町の案内人・黒岩直吉、北澤清志、日本山岳会会員・冠松次郎、京都大学山岳部・渡辺漸、映画撮影隊隊員の鹿島槍ヶ岳東尾根登攀（初登）を案内<br>８月、大町・有明の案内人・大和由松、東京農業大学山岳部部員・河内嘉吉の赤沢左俣～針峰～赤沢山（初登）登攀を案内<br>12月、大町の案内人・櫻井一雄、櫻井親次、立教大学山岳部部員・堀田弥一、斯波悌一郎、逸見真雄による鹿島槍ヶ岳（厳冬期初登頂）大冷沢北俣鎌尾根（厳冬期初登）登攀を案内 |
| 1932（昭和7）年 | ５月、大町の案内人・櫻井一雄、同志社大学山岳部部員・児島勘次の鹿島槍ヶ岳東尾根～天狗尾根（初踏破・初下降）登山を案内<br>12月～翌年１月、大町の案内人・櫻井一雄、櫻井親次、日本山岳会会員・小池文雄の烏帽子岳～赤牛岳（厳冬期初登）などの登山を案内 |
| 1933（昭和8）年 | ３月、大町の案内人・櫻井一雄ほか、立教大学山岳部部員・小原勝郎、湯浅巌の鹿島槍ヶ岳天狗尾根登攀（積雪期初登）を案内 |
| 1935（昭和10）年 | 12月～翌年１月、大町の案内人・櫻井一雄、櫻井親次、立教大学山岳部部員・山県一雄ら13名の鹿島槍ヶ岳天狗尾根（厳冬期初登）北壁ピークリッジ（積雪期初登）登攀（極地法による登山）案内 |

## 登山案内人の仕事 ― 山での生活 ―

登山案内人の一番の仕事は、登山者の希望にそった山行を安全・確実に先導することにあります。初期の登山案内人は客の荷物を一部背負い、歩荷も兼ねました。そして山行中の一切の露営や食事の世話もし、登山者はテント泊で案内人は油紙で仮小屋を作るか岩陰に宿をとることが一般的でした。そのため、料理上手はもちろん、焚き火や囲炉裏を囲んだ夜の話が得意なことも重要な要素であったといいます。

次にあげたのは、明治末期から大正初期の日本アルプス夏山登山での装備・食糧などの荷物や現地調達品の一例です。これら列挙した品々からは、当時の登山の様子や山での生活がどうであったのか想像を膨らますことができます。

ちなみに、下記の例では、これらの品物など登山者の荷物が約４貫（約 15kg）となり、登山案内人や荷担ぎは、それらを背負子につけて歩きました。

囲炉裏を囲む　槍沢小屋にて 大正～昭和初期頃

（左から）櫻井一雄、穂苅三寿雄、石川欣一　【個人蔵】

・「衣」……　肩掛け鞄　リュックサック　草鞋（１日１足）　着莫蓙　脚半
カナカンジキ（雪渓用）　和服　股引　メリヤス（伸縮性の高い綿糸・毛糸製の編み物）のシャツとズボン下
夏用洋服　鳥打帽（ハンチング帽）　手拭

・「食」……　白米　固形味噌　醤油エキス　砂糖　スターチ（澱粉）　鰹節　和布　桜鰕　白子干　干瓢　椎茸　焼麩
梅干　味付海苔　葱　馬鈴薯　パン　ビスケット　落雁風の菓子　果物缶詰　甘酒やお多福豆の缶詰
ウィスキーの小瓶　ナイフ・フォーク・匙　缶切　飯盒　小鍋　燃料として生のハイマツ　イワナ　筍
アザミ類・シダ類の若菜　イワブスマ（地衣類の一種）の澄まし汁　ウドの味噌汁　岳蕨の味噌汁
アザミの味噌汁

・「住」……　油紙　テント　毛布　行李（竹や柳で編んだ荷物入れ）　提灯・蝋燭　西洋蝋燭
アセチレン灯（カーバイトに水を作用させるガスカンテラ）　火縄　マッチ　小刀　針金　糸
紙・鉛筆・万年筆　小楊枝　歯磨　石鹸　薬品数種　捕虫網

※上記は、武田久吉著『明治の山旅』（創文社、1971）から、1905（明治38）年夏に武田久吉らが行った白馬岳登山の記述、田部重治著『わが山旅五十年』（桃源社、1964）から、1910（明治43）年、1911（明治44）年、1913（大正2）年に田部重治らが行った北アルプス夏山縦走の記述から拾ったものです。

登山案内風景　大正末期頃　【個人蔵】

## 武勇伝・珍談・奇談・・・エピソードにさぐる

### 「口でザイルをくわえる」

昭和初めのころの話です。大阪のある女子学校で針ノ木・立山・剱への縦走を計画し、信州・越中両側から登山案内人が選ばれましたが、何かにつけて張り合う両衆でした。そんな中、針ノ木小屋に泊まった夜のこと、信州側の案内人衆が、越中側の案内人のひとりから、ある言いがかりをつけられます。学校の先生が小屋宛に送ったはずのもち米を盗み食いしたというのです。一行にぎくしゃくした空気が漂います。

その翌々日、長次郎の雪渓を渡っていたときのこと、どうしたはずみか前々夜、もち米泥棒の言いがかりをつけた越中の案内人が確保していた３名の生徒がザイルもろとも転げ落ちてしまいました。これを見ていた信州の案内人のひとりは、自分の確保していたザイルの一端を口にくわえ、落ちてくるパーティーのザイルへ飛びついて転落を止め、雪渓のど真ん中でふんばり事なきを得ました。その日、小屋に入ってからのこと、信州の案内人は「案内人ともあろうものが、女の子の２人や３人確保できなくてどうする。もち米の１俵や２俵はどうでもなるが、人の命というものはそこらの店にはめったやたらに売ってはいねえんだぞ!」とまくし立てました。もち米泥棒の言いがかりをつけたその案内人は、これにはただ平謝りするしかなかったのでした。

※この内容は平林武夫先生遺稿集刊行会編『残雪』（信濃教育会出版部、1979）に掲載の記述を要約したものです。

### 「登山案内人試験 珍問答」

長野県では 1923（大正 12）年に「登山案内人取締規則」を公布し、案内人に免許を与えることになりました。その当時は登山案内人の免許を得るため、山のことを全く知らない巡査部長の試験を受けなければならないこともありました。その口頭試問の様子はおおよそ次のような様子でした。

試験官「世界で一番高い山はどこだね?」

案内人「エベレストです。」

試験官「バカこけ、ヒマラヤだ。よく覚えとけ!」

そのほか高山植物の名を30種類あげろ、などといった問題も出ました。案内人たちは尻取り形式で覚えこみます。チングルマ、マイヅルソウ、ウルップソウ・・・。30 にならないときは、「ミヤマ」と「タカネ」をくっつけて適当なことをいいます。試験官にとがめられれば、どこどこの何々沢には確かにきれいな花をつけて咲いているなどと、なるべく人の行かない場所をあげてあたかも実在するかのような説明を付け加えれば「よし」で通ったといいます。

※この内容は『山を想へば』（百瀬慎太郎遺稿集刊行会、1962）に掲載の記述を要約したものです。

### 「ピッケルでカモシカを狩る」

昭和はじめのころの話です。３月、ある登山案内人が地元中学の教師を案内して黒部へ入りました。途中、ふたりは新雪が一尺（約 30㎝）ばかり積もった樹林帯で丸々と太ったカモシカと出くわします。案内人は居ても立ってもいられず、客の教師をその場に待たせてカモシカを夢中で追いました。カモシカは雪の中では脚が埋まってしまいヨタヨタ歩きになります。追いついた案内人は、カモシカがこちらに顔を向けた瞬間、「ここだ!」とばかりに手に持ったピッケルでカモシカの額に力任せの一撃を加えました。まんまとカモシカ一頭を狩ったわけですが、猟の支度をしていなかったために泣く泣く肉は捨て、角と毛皮だけを持って帰りました。

その日、平の小屋につくと小屋番が「おい、食うものがなくて困ってる」といいます。今しがた捨ててきたカモシカの肉のことを話すと、小屋番の目の色が変わりました。それから２人は３時間かけて肉を取りに行ったのは言うまでもありません。

※この内容は瓜生卓造著『おおまち物語』（山と溪谷社、1976）に掲載の記述を要約したものです。

### 「“ バック ” で通す」

登山案内人は外国人登山者を案内することもありました。昭和のはじめ、山登りをするためにひとりのドイツ人が大町へ知人をたよってやってきました。しかし、その知人は都合が合わず、自分の代わりに山を案内してくれる、英語ができる案内人を探すことにしました。適任者探しに苦労していると、ある案内人が「私は自動車の助手をしていたので、ひとつだけ “ バック ” という英語は知ってるから何とかなるでしょう」と言い、ようやく引き受けました。白馬、立山、槍、穂高への２週間にわたる縦走で、大町で待つ知人は言葉の通じない２人の不便を心配していました。

元気に帰った案内人に「英語はどうした?」と聞くと、「いやそれがせ、英語というのは有り難てえもんで、小屋へ入るときには “ 小屋へバック ”、頂上へ登るときは “ 頂上へバック ”、下るときは “ 下へバック ”、荷物を背負うときには “ あなたの荷物をこちらへバック ” という具合で、お客さんもほかのことは分からねえが、終わりの “ バック ” だけはよく分かるんで、実に面白い山歩きができたわね」とのこと。「客人は喜んだかね?」と聞くと、「いやはや喜びましたよ。松本駅で別れるときには向こうが “ バック ” をやりましたよ。“ アナタ大町へバック、ワタシハドイツへバック ”。」

※この内容は平林武夫先生遺稿集刊行会編『残雪』（信濃教育会出版部、1979）に掲載の記述を要約したものです。

登山案内人たち　大正期頃　【個人蔵】
（左から２人目は登山案内人・黒岩直吉）

# 戦中・戦後、そして平成へ ―現在につながる思い―

日中戦争・太平洋戦争が始まると、山からは登山者の姿が徐々に消えていきました。戦後、ようやく山に登山者がもどりはじめた矢先、1949（昭和 24）年に百瀬慎太郎がこの世を去ります。組合長として采配をふるってきた慎太郎亡きあとも、大町登山案内者組合が存続されることが、その年のうちに決定されました。昭和 30 年代以降、登山スタイルの移り変わりから、登山案内人たちも近代的ガイドへと変わっていきました。その後、平成に入り「大町登山案内人組合」に改称し、その活動は現在にいたります。今年 2017（平成 29）年、大町登山案内人組合は、登山ガイドグループの先駆けとして、創立 100 周年の大きな節目を迎えました。

## 戦争と山

昭和に入ると、日本は中国と戦争をはじめました。中国各地に戦いがひろがる中、日本はアメリカやイギリスなどの国々とも東南アジアや太平洋を戦場にして戦争をはじめました。15 年にわたるこれらの戦争は、1945（昭和 20）年 8 月 15 日の日本の降伏でようやく終わりました。

日中戦争や太平洋戦争が始まってからも北アルプスを訪れる登山者の姿はありましたが、戦争が激しさを増すにつれ、山に登山者の姿を見つけるのも難しくなり、組合は一時休業状態となります。さらに 1943（昭和 18）年 6 月には、組合の事務所となっていた旅館・對山館が戦時下の影響を受けて廃業し、慎太郎は一家で居を移すことになりました。

終戦後、1948（昭和 23）年夏になってようやく慎太郎は、戦後初めて大沢小屋を開くとともに、戦中に大破していた針ノ木小屋を解体して修理します。この頃から、次第に山へ登山者が戻りだし、大町の登山案内人たちも再び活躍の場を得ます。

一杯傾ける百瀬慎太郎　大沢小屋にて
1944（昭和 19）年 7 月推定　【個人蔵】

## 慎太郎なきあとの大町登山案内者組合

戦後、大沢・針ノ木の両小屋を再開したり、大町登山案内者組合の活動も再開しはじめたりした矢先、百瀬慎太郎は 1949（昭和 24）年 3 月 5 日、病のためこの世を去ります。享年 56 歳でした。組合長として采配をふるってきた慎太郎亡きあと、組合は岐路に立たされます。結果、同年 6 月に組合員 11 人で新たな組合長のもとに組織存続を決定しました。

昭和 30 年代に入ると登山を取り巻く諸環境も整備・充実し、個人山行を中心に「無案内無人夫登山」が主流になっていきました。こうした登山スタイルの移り変わりから、登山案内人たちも近代的ガイドへと変わっていきました。そして、1994（平成 6）年には、大町登山案内者組合はこれまでの規約を改正し、「大町登山案内人組合」に改称して再スタートをきり、現在に至ります。

現在、同組合の事務局は JR 信濃大町駅駅舎にある大町市観光協会内に置かれており、今年 2017（平成 29）年に創立 100 周年を迎えました。

昭和 30 ～ 40 年代頃の登山案内での一コマ
（左は登山案内人・平林高吉）

## 現在に受け継がれる慎太郎の山への思い

### 大町登山案内人組合

登山ガイドグループの先駆けとして、今年、創立から 100 年の歴史を刻んだ大町登山案内人組合。現在（2017 年）、35 名の所属メンバーはガイド以外にも、登山道修復などの登山環境整備や、登山口や駅前での相談など遭難防止といった面や、さらには救助隊員として救助に当たるなど、地域社会の振興につながる活動を展開させています。

### 大沢小屋・針ノ木小屋　― 山小屋のともしび ―

百瀬慎太郎亡き後、針ノ木・大沢両小屋の経営は長女・美江が引き継ぎました。慎太郎を慕う人びと、いにしえの歴史ロマンあふれる針ノ木峠や針ノ木岳を愛する人びとの支えもあり、1956・64（昭和 31・39）年と二度、針ノ木小屋の大改修増築工事を手がけ、大沢小屋も 1969（昭和 44）年に全面改築しました。

現在、内孫の堯氏が三代目、その長男で曾孫にあたる陽氏が四代目として山小屋の灯をともし続けています。

大沢小屋

針ノ木峠に建つ針ノ木小屋

針ノ木岳

### 針ノ木岳慎太郎祭

1958（昭和 33）年から、毎年 6 月に大沢小屋上部の篭川谷・針ノ木雪渓上で開催されている針ノ木岳慎太郎祭。毎年 6 月第 1 日曜日に開催されるこのお祭りでは、針ノ木岳周辺の開拓者・百瀬慎太郎をしのぶとともに、夏山開きを祝い、登山の安全を祈り願います。北アルプスの近代登山発展に貢献した慎太郎。郷土にはその願いが今も伝わっています。

針ノ木雪渓　篭川谷

針ノ木岳慎太郎祭

大沢小屋前のレリーフ群

慎太郎の没後、1953（昭和 28）年に大町山岳会・平林武夫の主唱で大沢小屋前の大岩に慎太郎の記念レリーフが設置されます。その後、1957（昭和 32）年に大町山岳会が関係者を招いて大沢小屋前で慎太郎を偲ぶささやかな会を催し、翌 1958（昭和 33）年、大沢小屋前で第 1 回「慎太郎祭」開催。以後、主催や会場などの改変を経て毎年開催され、今年 2017（平成 29）年で第 60 回を数えました。

### 大町市「山岳文化都市宣言」

百瀬慎太郎の歌碑　JR 信濃大町駅前　1986（昭和 61）年 大町ライオンズクラブ寄贈

大町市では、百瀬慎太郎をはじめ、この地に暮らしてきた先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていくため、自然と人とが共生する「山岳文化都市」とすることを 2002（平成 14）年 3 月に宣言し、現在、そうしたまちづくりに市をあげて取り組んでいます。

現在、JR 信濃大町駅前には、「山を想へば人恋し 人を想へば山恋し」という慎太郎が晩年に口ずさんだフレーズを刻んだ碑が建ち、列車から降り立つ登山者や観光客を出迎えています。

*「山を想へば人恋し、人を想へば山恋し。童謡ならぬ老謡を口吟みながら、我ながらいつまでも抜けきらない老センチメンタリストを自分に発見するのである。山と人、その交錯の相をぢっと見せつけられて来た自分である。」* 百瀬慎太郎著「針ノ木峠雑談」（1948 年）

## 《コラム》　登山ガイドの現在

戦中戦後の低迷期を経た登山界は 1956（昭和 31）年の日本隊マナスル初登頂後の一大登山ブームで登山形態を大きく変えました。

社会人山岳会が爆発的に増え、山小屋・登山道整備にも拍車がかかり今以上に山小屋や登山道が作られました。これは案内人や歩荷を必要としない登山を可能とし、勢い従来の案内人や歩荷を雇った登山形態はほとんど見られなくなりました。

昭和末からのバブル時代は縦型社会、３Ｋ（きつい、汚い、危険）を忌避する風潮を生み、若者の登山離れと山岳部・山岳会における登山技術の継承、世代の分断という登山界にとっては大きな問題をもたらしました。続いて、健康志向の高まりから中高年登山ブームが沸き起こり百名山ブームへとつながって行きました。

これを受け旅行会社によるツアー登山も盛んとなり、またガイド主宰による小規模ツアーやプライベートガイドも生業として成り立つようになって来ました。

これらのツアーでの度重なる事故が、ガイドの重要性を認知させガイド需要の高まりにもつながりました。加えてガイド登山が登山技術習得の場としての機能を発揮し、山岳会が失い始めた登山技術継承の役目を担うという側面も持ち始めています。

国内には「信州登山案内人制度」に代表される案内地域を限定したガイド資格制度や「日本山岳ガイド協会」に見られる「自然ガイド」「登山ガイド」「フリークライミングインストラクター」など、登山形態ごとに区分されたガイド資格制度などがあります。

しかし、未だ国内における登山ガイドの社会的位置付けは定まっていませんし、幅広い登山形態に応えきる体制も出来上がっているとは言えません。ガイド資格を国家資格にという声もあるようです。多くの方が楽しく安全な登山を行うため、登山ガイドが担う役割はますます高まって行くことでしょう。

（西田 均／市立大町山岳博物館 指導員）

## 《コラム》　登山ガイドのもうひとつの顔・・・遭難防止対策・山岳救助の現場から

かつて狩猟や漁、歩荷、山仕事などで地元の山々に精通していたことから生まれた登山案内人の歴史は、大町登山案内者組合（現 大町登山案内人組合）発足から一世紀を経た現在も受け継がれ、所属案内人は拠点とする国内有数の山域「北アルプス」を深く知る存在であり、山で様々な顔を持ちます。

大町登山案内人組合所属の案内人は登山者を山へと誘う役目を担う一方、日頃通いつめている北アルプスが「ホームグラウンド」であり、伝承含め地形や一年を通じた気象などを把握していることから、山の安全を守るという役目を担っています。北アルプス北部遭難防止対策協会、通称「北ア北部遭対協」の救助隊員です。

北ア北部遭対協は四季を通じて入山者の多い時期には、登山口に相談所を設置し、隊員が交代で登山者へ安全登山を呼びかけているほか、登山道の一部整備なども担います。また、稜線での登山者の安全の砦となる山小屋と親交が深く、山小屋が行う登山者にとって安全な環境づくりに協力している者も多くいます。

さらに、万一の遭難事故の際には長野県警山岳遭難救助隊と共に現場に駆けつけて救助活動にあたります。救助現場は一般登山道とは限らず、悪天候時であることもあり、その山に精通していることと、悪条件でも活動できることが求められ、各隊員は定期的に訓練を重ねています。長野県が独自に実施する「北アルプス常駐パトロール隊」の隊員として夏から秋シーズン、数十日間にわたって稜線に暮らし、遭難防止と救助活動に従事している者もいます。

案内人であるとともに救助隊員としての顔を持つ人々の想いは、「山への恩返しになれば」、「山を楽しんでもらう延長線に救助がある」、「一人でも山で命を落とす人を減らしたい」など様々ですが、共通して「山が好き」という礎があります。大町登山案内人組合を立ち上げた百瀬慎太郎の「山を想へば～」の一節に垣間見る、山への気持ちは、ここにも受け継がれているのではないでしょうか。

（矢口 拓／大町登山案内人組合）

遭難者を捜索する遭対協と県警の救助隊員

# 岳のまち おおまち

日本の本州中央部に位置する信州・長野県。その北西部、松本盆地の北端に位置する大町市は、北アルプスへの登山口を抱え、西部一帯に高く急峻な峰々が連なる山岳地帯があります。北の白岳・五龍岳から南の槍ヶ岳頂上までを収める市内の面積は全国屈指の広さです。市街地の標高は 700 メートル余り。典型的な内陸性の気候で、北アルプスの豊かな恵みに育まれた市内には、黒部ダムへ至る立山黒部アルペンルートをはじめ、高瀬渓谷や仁科三湖、スキー場やキャンプ場、文化財や博物館があり、豊富な温泉にも恵まれて、四季を通じた観光が楽しめる山岳文化都市です。

【大町市観光協会提供】

## 大町市の位置

大町市の位置
東経　137° 51′ 3″
北緯　36° 30′ 10″
海抜　726 m
（観点：大町市役所）

残雪の後立山連峰と
雪解け水を集めて流れる高瀬川

【大町市観光協会提供】

# 大町市の自然・風景

## 大町市のシンボル

ライチョウ

ニホンカモシカ

カタクリ

オオヤマザクラ

## ダムのまち大町

黒部ダム

大町ダム

七倉ダム

高瀬ダム

## 清らかな流れ

鹿島川

篭川

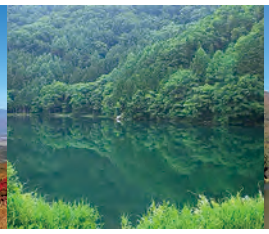
高瀬川

農具川

犀川

## 仁科三湖の魅力

青木湖


中綱湖

木崎湖

## 花と出あう湿原

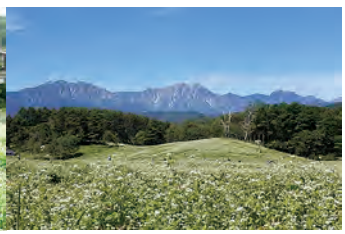
居谷里湿原

唐花見湿原

## さわやかな高原

黒沢高原

新行高原


中山高原

【一部写真を除き全て大町市観光協会提供】

# 北アルプスの山岳観光

【大町市観光協会提供】

現在、私たちが北アルプスの稜線や渓谷、あるいはその山麓を訪れるとき、それぞれ違った魅力にひかれ、さまざまな楽しみを期待しています。高山植物が咲き乱れるお花畑、高山に生きる動物たち、山と渓谷が織り成す山岳美、険しい岩と雪の世界、そして山麓独特の文化的景観と出で湯・・・。裾野から山頂まで四季にわたる山の魅力は尽きず、北アルプスは世界に誇ることができる日本の山々の代表格となっています。

こうした山の魅力にひかれ、人びとはそれぞれの目的で北アルプスを楽しんでいます。ダム見学や景勝地探訪、温泉入浴などの観光旅行。あるいは、夏山歩きやトレッキング、ゲレンデスキーやスノーボード、自然観察や山麓散策などのレクリエーションやレジャー。さらに、ロッククライミングや冬山登山などのスポーツ。また、山岳写真、山岳画などの芸術・・・。その例えは枚挙にいとまがありません。

## 北アルプス

北アルプス（飛騨山脈）は長野・新潟・富山・岐阜の四県にまたがり、奥穂高岳（3,190m）を筆頭に標高 2,000m を超える高山を多く連ねて本州の中央部に位置する山脈で、中央アルプス（木曽山脈）・南アルプス（赤石山脈）とともに日本の屋根ともいえる日本アルプスを形成しています。

北アルプスの山脈群は、最北端は新潟県糸魚川市親不知付近の日本海海底からそそりたち、岐阜県高山市と長野県松本市との県境に位置し安房峠をはさんでそびえる乗鞍岳（最高峰・剣ヶ峰 3,026m）を最南端として続き、北の朝日岳（2,418m）から南の乗鞍岳まで直線で約 87.5km にわたります。

この間は黒部・高瀬・梓川が形成する渓谷によって三筋の山脈に大別され、北から、白馬岳（2,932m）や鹿島槍ヶ岳（2,889m）を抱える後立山連峰（鹿島槍連峰）、剱・立山連峰、裏銀座縦走路と呼ばれる登山コースが通る烏帽子・鷲羽連峰、常念山脈、槍・穂高連峰、乗鞍火山脈の各山域に区分されます。

一帯は 1934（昭和 9）年に中部山岳国立公園に指定され、自然環境・景観が保護されつつ登山者・スキーヤー・観光客など多くの人々に親しまれています。

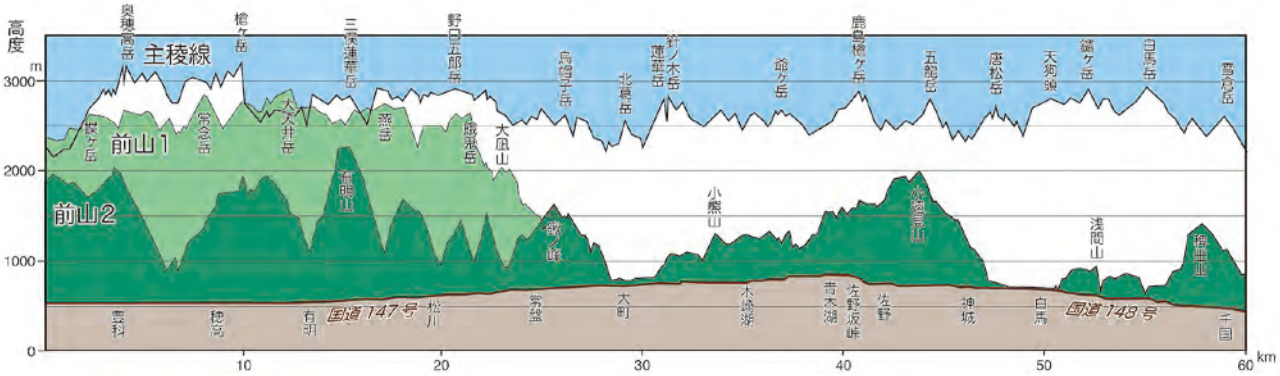
冬の鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁と北壁（ヘリ空撮）

## 《コラム》　後立山連峰　― 美しさの秘密 ―

安曇野や神城盆地から眺める後立山の美しさは格別です。その理由を、地形や気象などの自然条件からさぐってみましょう。

晩秋の後立山連峰　左端の未冠雪峰が鍬ノ峰（1,623m）

北アルプスの主稜線は、槍穂から"裏銀座"をへて後立山へ連なり、長野と岐阜・富山との県境になっています。主稜線の手前には、蝶ヶ岳から燕岳をへて鍬ノ峰までのびる「前山１」、有明山･鍬ノ峰･小遠見山･稗田山を連ねる「前山２」があります。




北アルプスの稜線高度

前山１は常念山脈ともよばれ、主稜線に肩をならべる山々です。高さが同じでも、遠くにあれば低く、近くにあると高く見えるため、豊科～松川からは主稜線が見えません。ところが、前山１は常盤付近で急に低くなり、大町と白馬では前山２がなくなります。さらに、大町～白馬では主稜線が近く（約 10km）にあるために山々が高く大きく見え、麓から山頂まで高度差 2,000m の大パノラマを眺めることができます。

北アルプスでは日本海へむかって積雪量が多くなり、晩秋～初夏の長期間にわたって冠雪し、真っ白な峰々が青空に映えます。大町～白馬から眺める後立山連峰は、①前山が低く、②主稜線が近く、さらに③多雪であるために、その美しさはきわだったものになります。

（矢野孝雄／市立大町山岳博物館 専門員）

## 《コラム》　景観の素晴らしさを実感する

高山植物の総数は、「日本の高山植物（豊国秀夫著）」では574種、「高山に咲く花（清水建美著）」では440種とされていますが、いずれにしても山岳県である長野県では、その大半の植物を見ることができ、それらから成る高山の景観に心奪われた方も多いのではないでしょうか。

高山植物の花が咲き乱れる“お花畑”

志村烏嶺著
『高山植物採集及培養法』
成美堂書店　1909(明治42)年刊行

そういった高山植物へのあこがれは、明治時代に出版された「高山植物の培養（河野齢蔵著）」や「高山植物採集及培養法（志村烏嶺著）」などで栽培という形で伺い知ることができます。現在に至っては、国内で高山植物を手掛ける植物園は六甲高山植物園（兵庫県）や白山高山植物園（石川県）、白馬五竜高山植物園（長野県）などに代表されますが、植物園全体からすると前述のような施設がごく限られているのは、高山植物の栽培展示が安易ではないことを物語っているのかもしれません。

山岳博物館でも数年前から高山植物の種子を得て、40種ほどの実生の栽培を試みていますが、なかには、うまく育てられない種もあります。そのようななかでも、種子から開花に至るまでどのように成長していくのかを知り、また、試行錯誤を繰り返し、どのようにすればうまく育てられるのか思いを巡らすことで、より一層、高山植物に対する興味・関心も膨らみ、長い時を経て日本の高山に形成された景観にますます畏敬の念を抱きます。

（千葉悟志／市立大町山岳博物館 学芸員）

## 《コラム》　山で出会う動物たち

夏の北アルプスで高山帯に生息する動物の代表格はライチョウです。このほかに鳥類としてはイワヒバリやホシガラスなどが知られています。ライチョウ以外の鳥は冬になると里に下りてしまうのですが、ライチョウはオオシラビソやダケカンバが生えている亜高山帯に留まり春になるのを待ちます。

哺乳類ではニホンカモシカ、ツキノワグマなどが生息しています。近年、ニホンジカ、ニホンザルの目撃例も多くなってきました。

高山で生活している動物たちと直接出会うことは稀かもしれませんが、登山道には動物たちが残した情報がたくさんあります。登山道は人ばかりでなく、動物たちも使っている道で、しかも彼らにとっては見通しのきく場所であるため、糞をする場所にもなっているのです。これらの情報からテン、オコジョ、イタチなどが生息していることがわかります。また、ライチョウの砂浴び跡も登山道でみられます。

鳥類・哺乳類だけでなく、昆虫や両生爬虫類などたくさんの種類の動物が夏の高山で生活しています。

（宮野典夫／市立大町山岳博物館 指導員）

北アルプスの高山帯に生息するライチョウ（オス）

# 展示資料図版（実物資料）

ここに挙げた資料は、展示資料のうち、展示パネルに挿入した写真資料を除く実物資料である。なお、写真は全て当館撮影による。

## 第２章　大町登山案内人組合の誕生

### 對山館と百瀬慎太郎

Ⅱ 2-1　對山館（たいざんかん） 再現ミニチュア模型
1941（昭和 16）年頃想定　縮尺 50 分の 1
（製作：イサミヤ造形研究所　2002 年）

当時の建物外観・配置イメージ。母屋は間口８間・奥行 12 間。大火の教訓をいかしたと思われる切妻白壁総３階建て屋根裏部屋付。町場の伝統的家屋は背の低い平屋か２階建てが多かったので、これは頭抜けて高い建物でした。

Ⅱ 2-2　百瀬慎太郎（ももせしんたろう）が意匠考案したと思われる手ぬぐい

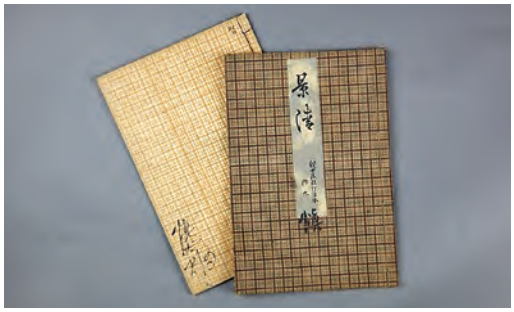
慎太郎は絵も描きました。山、人、温泉風景、山と街のある風景など躍動感のあるスケッチが残されています。その時々の感動を、短歌と同様に描きとどめたものでしょう。

Ⅱ 2-3　『山を思ふ』第２輯（しゅう）
山を思ふ会　1926（大正 15）年刊行

「山を思ふ会」には慎太郎とその盟友･伊藤孝一、赤沼千尋のほか、政治家・後藤新平も名を列ねていました。後藤と慎太郎のつながりについては、1917（大正６）年に日本初の夏期大学として木崎湖畔に開講した信濃木崎夏期大学がきっかけと思われます。

Ⅱ 2-4　百瀬慎太郎（ももせしんたろう）旧蔵『シエリの詩集』
崇文館書店　1924（大正 13）年刊行〔2 版〕

イギリスの詩人パーシ・ビッシュ・シェリーの詩集（松山敏 訳）。慎太郎から弟のように可愛がられたという佐藤貢に贈られたもの。佐藤は、時に小屋番もし、對山館に長くかかわった人物。戦時中、佐藤の夫人がロシア人であるため、慎太郎は一家を土蔵にかくまったこともあったといいます。



Ⅱ 2-5　百瀬慎太郎（ももせしんたろう）旧蔵　謡本（うたいぼん）　景清（かげきよ）／班女（はんじょ）

慎太郎は短歌だけではなく、随筆など文芸全般に通じていましたが、謡曲にも親しんでいたようです。

Ⅱ 2-6　百瀬慎太郎（ももせしんたろう）『山を想へば』
百瀬慎太郎遺稿刊行会　1962（昭和 37）年刊行

遺稿・短歌集・往復書簡・年譜などからなり、慎太郎を中心に大町の對山館を舞台に展開された明治末から昭和初期の北アルプス近代登山史の一幕が収録された貴重な一冊です。

Ⅱ 2-7　大沢小屋（おおさわ）前に設置された
百瀬慎太郎（ももせしんたろう）レリーフの複製（石膏着色）

1987（昭和 62）年、大町山岳会により、針ノ木岳慎太郎祭 30 周年を記念して大沢小屋前の岩に慎太郎肖像レリーフと略歴プレートが設置されました。

## 大町登山案内者組合と登山案内人群像

Ⅱ 3-1　日本山岳会の機関誌『山岳』第 13 年第 1 号
1918（大正 7）年刊行

本誌上において、慎太郎の私信を掲載する形で、1917（大正 6）年夏から大町で大町登山案内者組合が設立されたことが初めて紹介されました。

Ⅱ 3-2　案内人料金表
左：1952（昭和 27）年／右：1951（昭和 26）年

大町登山案内者組合では設立当初から案内人の案内料を定めていました。これは、登山者と案内人との料金をめぐるトラブルを避けるためでした。

Ⅱ 3-3　案内人・西澤彰（にしざわあきら）使用 ハバキ

すねに巻いた幅広の紺木綿製の布。染料の藍（あい）がヘビ除けになるともいわれ、農作業や山案内のときにすねを保護するために身に付けました。

Ⅱ 3-4　案内人・西澤彰（にしざわあきら）使用 カナカンジキ（三本爪）

近代登山の夏山では、雪渓歩きに用いられました。

Ⅱ 3-5　案内人・櫻井一雄（さくらいかずお）使用 テブカワ（カモシカ毛皮製）

手袋。主として狩猟時の防寒具として用いられました。

Ⅱ 3-6　案内人・平林高吉（ひらばやしたかきち）使用 カサカケワラジ

ワラジにつま先を保護するカサの部分が取り付いたもの。

Ⅱ 3-7　案内人・平林高吉（ひらばやしたかきち）使用 ワカンジキ

伝統的な雪上歩行具で、国内の近代登山でも転用されてきました。斜面でも歩けるように木製の爪がつけられています。

Ⅱ 3-8　案内人・平林高吉（ひらばやしたかきち）使用 キゴザ

イグサの茎を編んだ敷物に紐 ( ひも ) と横板をつけるなどして着用できるように加工したもので、蓑 ( みの ) や油紙とともに山での雨具や防寒具として使用されました。

Ⅱ 3-9　案内人・平林高吉使用　大町登山案内者組合の印半纏

大町登山案内者組合の組合員が揃いで着た紺木綿製の印半纏（しるしばんてん）。襟には「日本アルプス」「大町口案内者」と染め抜きされています。

Ⅱ 3-10 案内人・平林高吉使用 チョッキ

大正・昭和期使用。大正末期から昭和初期頃以降、登山案内人たちの服装も徐々に、冬のスキー登山や岩登りに対応するため、西洋スタイルの装備や服装を取り入れる者も多くなっていきました。

Ⅱ 3-11 案内人・平林高吉使用 登山アルバム

案内した登山者から贈られたもの。スチールカメラが一般に広く普及していなかった大正から昭和初期頃、登山者が山行中に撮影した紙焼き写真やそれらをまとめた写真帳を感謝と記念の印として、同行した案内人へ贈られることもありました。

Ⅱ 3-12 案内人・平林高吉使用 入林許可証

大町営林署、1942（昭和 17）年 8 月 11 日許可。当時の登山案内人はこうした入林許可証やバッジなどのほかに、警察署発行の案内人許可書など許認可証や身分証の類を山行中に携行しました。

Ⅱ 3-13･14《参考展示》案内人（後に平村登山案内人組合）・小日向梅次使用 入林許可証（左）、案内人許可書（右）

入林許可証（左）：1935（昭和 10）年 6 月 27 日許可。「入林ノ目的　登山案内」と印字されています。

案内人許可書（右）：1925（大正 14）年 8 月 6 日、大町警察署。「案内ノ場所」の欄には「針木ヨリ立山方面／蓮華、烏帽子、野口五郎／槍、大天井、常念山脈／爺 八方 白馬山脈」と記載されています。

Ⅱ 3-15 案内人・大和由松旧蔵
『白頭山 京都帝國大學白頭山遠征隊報告』
梓書房　1935（昭和 10）年刊行

大和由松は、1935（昭和 10）年、京大白頭山遠征に芦峅寺の立山ガイド佐伯宗作とともに参加。1927（昭和 2）年の早大篭川谷雪崩遭難を経験後、「動かずの松」と言われるくらい頑固で慎重な性格に。猟はやらなかったといい、山人を中心とした登山案内人から近代的なガイドへの過渡期に生きたひとりです。

Ⅱ 3-16《参考展示》
スイス・グリンデルワルトの山岳ガイドたちの写真
上:1880（明治13）年当時／下:1887（明治20）年当時

ヨーロッパにおいて本場アルプスの峰々に人々の目が向けられるようになったのはフランス革命（1789 ～ 99 年）頃からだとされます。アルプス山麓における初期の山岳ガイドも、日本と同様に、やはり地元の猟師あるいは牧夫でした。時を経るにしたがいアルプス山麓への旅行者やアルプスの峰々への登山者が増加し、ガイドを職業とする者も増えました。一方で登山者と料金やサービス面でのトラブルも増え、加えて悪質なガイドもどきも現れるようになったといいます。

Ⅱ 3-17《参考展示》
スイス山岳ガイドの公式手帳
1990（平成 2）年頃配布（未使用）
左：ドイツ語版／右：フランス語版

これらはスイスの山岳ガイドが携帯する公式の手帳。ガイドとして登録されると、その証しとしてガイド手帳が渡され、登山者を案内した際には、その手帳に山行中の様子や感想、ガイドへのお礼や評価を客に記入してもらうといいます。こうしたガイドの質に一定の基準を設けて維持し、ガイド自身にも誇りを持って案内させる仕組みは、スイス・ベルン州では 1856（安政 3）年に条令として施行されたそうです。

## 戦中・戦後、そして平成へ ― 現在につながる思い ―

Ⅱ 4-1　『岳（たけ）とともに　先達（せんだつ）
大町登山案内人組合創立 80 周年記念誌』
大町登山案内人組合　1997（平成 9）年刊行

Ⅱ 4-2　『大町登山案内人組合創立 90 周年記念誌
「山を想えば……」』
大町登山案内人組合　2008（平成 20）年刊行

Ⅱ 4-3　『山の祝（ほが）い　第 15 回針ノ木岳慎太郎祭
平林武夫（ひらばやしたけお）先生追悼の集い』
大町市・大町山岳会　1972（昭和 47）年刊行

# 展示資料目録（実物資料）

ここに挙げた資料は、展示資料のうち、展示パネルに挿入した図版資料（写真・図表等）を除く実物資料である。なお、これら資料は全て当館蔵。

## 第２章　大町登山案内人組合の誕生

### 對山館と百瀬慎太郎

| No. | 展示実物資料名　備考 | 寸法（㎝） |
|---|---|---|
| Ⅱ 2-1 | 對山館 再現ミニチュア模型　1941（昭和 16）年頃想定　縮尺 50 分の 1 | L85 × W33 × H30 |
| Ⅱ 2-2 | 百瀬慎太郎が意匠考案したと思われる手ぬぐい | L80 × W33 |
| Ⅱ 2-3 | 『山を思ふ』第２輯　山を思ふ会　1926（大正 15）年刊行 | L23 × W15 × T1.2 |
| Ⅱ 2-4 | 百瀬慎太郎旧蔵 『シヱリの詩集』　崇文館書店　1924（大正 13）年刊行〔2 版〕 | L12.8 × W9.8 × T1.4 |
| Ⅱ 2-5 | 百瀬慎太郎旧蔵 謡本　景清／班女 | 各 L23 × W16 × T0.5 |
| Ⅱ 2-6 | 百瀬慎太郎『山を想へば』　百瀬慎太郎遺稿刊行会　1962（昭和 37）年刊行 | L22 × W15.5 × T2.1 |
| Ⅱ 2-7 | 大沢小屋前に設置された百瀬慎太郎肖像レリーフの複製（石膏着色） | L31 × W31 × T4 |

### 大町登山案内者組合と登山案内人群像

| No. | 展示実物資料名　備考 | 寸法（㎝） |
|---|---|---|
| Ⅱ 3-1 | 日本山岳会の機関誌『山岳』第 13 年第 1 号　1918（大正 7）年刊行 | L24 × W16 × T1.2 |
| Ⅱ 3-2 | 案内人料金表　左：1952（昭和 27）年／右：1951（昭和 26）年 | 左：L11.8 × W8.2 ／<br>右：L9 × W6.2 |
| Ⅱ 3-3 | 案内人・西澤彰使用 ハバキ | 各 L35.5 × W40 × T0.4 |
| Ⅱ 3-4 | 案内人・西澤彰使用 カナカンジキ（三本爪） | 各 L10 × W11.3 × H7 |
| Ⅱ 3-5 | 案内人・櫻井一雄使用 テブカワ（カモシカ毛皮製） | 各 L30 × W17 × T5 |
| Ⅱ 3-6 | 案内人・平林高吉使用 カサカケワラジ | 各 L26 × W12.5 × T7 |
| Ⅱ 3-7 | 案内人・平林高吉使用 ワカンジキ | 各 L36.5 × W24 × T13.5 |
| Ⅱ 3-8 | 案内人・平林高吉使用 キゴザ | L130 × W76 × T0.6 |
| Ⅱ 3-9 | 案内人・平林高吉使用 大町登山案内者組合の印半纏 | L83 × W127 × T1.5 |
| Ⅱ 3-10 | 案内人・平林高吉使用 チョッキ | L57 × W40 × T1.5 |
| Ⅱ 3-11 | 案内人・平林高吉使用 登山アルバム | 奥：L18.5 × W27 × T2.3 ／<br>手前：L19 × W28.7 × T3 |
| Ⅱ 3-12 | 案内人・平林高吉使用 入林許可証 | L13.5 × W9 |
| Ⅱ 3-13 | 《参考展示》案内人（平村登山案内人組合）・小日向梅次使用 入林許可証 | L13.5 × W9 |
| Ⅱ 3-14 | 《参考展示》案内人（平村登山案内人組合）・小日向梅次使用 案内人許可書 | L9 × W11 |
| Ⅱ 3-15 | 案内人・大和由松旧蔵『白頭山 京都帝國大學白頭山遠征隊報告』<br>梓書房　1935（昭和 10）年刊行 | L26 × W20.5 × T2.4 |
| Ⅱ 3-16 | 《参考展示》（写真）スイス・グリンデルワルトの山岳ガイドたち<br>上：1880（明治 13）年当時／下：1887（明治 20）年当時 | （台紙含む）L22.7 × W24 ／<br>L27.2 × W34 |
| Ⅱ 3-17 | 《参考展示》スイス山岳ガイドの公式手帳　1990（平成 2）年頃配布（未使用）<br>左：ドイツ語版／右：フランス語版 | 各 L15.7 × W11.7 × T6 |

### 戦中・戦後、そして平成へ ―現在につながる思い―

| No. | 展示実物資料名　備考 | 寸法（㎝） |
|---|---|---|
| Ⅱ 4-1 | 『岳とともに 先達　大町登山案内人組合創立 80 周年記念誌』<br>大町登山案内人組合　1997（平成 9）年刊行 | L25.7 × W18.5 × T0.5 |
| Ⅱ 4-2 | 『大町登山案内人組合創立 90 周年記念誌　「山を想えば……」』<br>大町登山案内人組合　2008（平成 20）年刊行 | L29.7 × W21 × T0.2 |
| Ⅱ 4-3 | 『山の祝い　第 15 回針ノ木岳慎太郎祭 平林武夫先生追悼の集い』<br>大町市・大町山岳会　1972（昭和 47）年刊行 | L20.3 × W15 × T0.3 |

# 百瀬慎太郎・大町登山案内人組合 関係略年表

| 西　暦 | 和　暦 | 事　　項 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1815年 | 文化12年 | 2月、大町中町に居た百瀬家の祖先・新右衛門が大町八日町の家屋敷を50両で買い取って転居 | |
| 1854年 | 安政元年 | | アルフレッド・ウィルス、ヴェッターホルン登山（「アルピニズム」「（アルプスにおける）近代登山」のはじまりとされる）<br>日米和親条約（神奈川条約） |
| 1867年 | 慶応3年 | | 大政奉還。王政復古の大号令 |
| 1868年 | 明治元年 | | 明治維新（五箇条の御誓文、明治改元） |
| 1870年 | 明治3年 | | 山廻り役廃止 |
| 1874年 | 明治7年 | | 内務省に地理寮が設けられて以後、政府による地形図作りのための国内全土を対象とした本格的な三角測量が行われる |
| 1877年 | 明治10年 | | ウィリアム・ガウランド、槍ヶ岳と乗鞍岳登山 |
| 1878年 | 明治11年 | | アーネスト・メイスン・サトウ、A・G・S・ホースとともに大町から針ノ木峠越え<br>開通社（頭取は信州野口村庄屋役三代目・飯嶋善造）、信越連帯新道（針ノ木新道）を開通 |
| 1881年 | 明治14年 | | アーネスト・メイスン・サトウとA･G･S･ホウズの共編により『中部・北方日本旅行案内』として初版が発行（本文中に、W・ガウランドが飛騨山脈を称した呼称「日本のアルプス」が初めて活字にされる） |
| 1882年 | 明治15年 | | 廃道届が出され、針ノ木新道は廃道となる |
| 1883年 | 明治16年 | | 渡邊敏と窪田畔夫ら、白馬岳登山（白馬岳最初の近代登山） |
| 1884年 | 明治17年 | | 渡邊敏と窪田畔夫、烏帽子・鷲羽連峰方面などへ縦走登山 |
| 1889年 | 明治22年 | 11月、大町八日町の大火により百瀬家の家屋も焼失 | |
| 1890年 | 明治23年 | この頃の春、百瀬慎太郎の祖父・百瀬新栄、旅館新築に着手（旅館は百瀬家の家印から「今旅館」（後に通称「對山館」）と称す） | 1889年　大日本帝国憲法発布 |
| 1892年 | 明治25年 | 12月10日、父・金吾、母・万世の長男として、百瀬慎太郎が大町八日町の旅館・對山館に生まれる | |
| 1893年 | 明治26年 | 8月、イギリス人宣教師ウォルター・ウェストンら、猟師4名を案内・荷担ぎに、針ノ木峠越えなど登山（猟師のうち2名は遠山品右衛門の長男・作十郎、品右衛門の妻・きさの弟・荒井永吉あるいは大町の案内人・大西又吉か） | |
| 1894年 | 明治27年 | 12月、慎太郎、囲炉裏の熱湯をかぶり全身やけどを負う。右目失明（2歳） | 1894～1895年　日清戦争<br>志賀重昂、『日本風景論』を著す（「登山の氣風を興作すべし」と説き、当時国内唯一の登山案内書、登山技術解説書として、日本での近代登山興隆の気運を高めるひとつのきっかけとなった書籍とされる） |
| 1896年 | 明治29年 | | ウォルター・ウェストン、『日本アルプス 登山と探検』 を著す（ロンドンで出版されたこの本を通じ、W・ガウランド命名による「日本アルプス」の名は世界に知られるようになる） |
| 1898年 | 明治31年 | | 河野齢蔵ら、自身第1回目となる白馬岳登山（高山植物採集を目的としたもので、博物学者が白馬岳に登山した最初） |
| 1899年 | 明治32年 | 4月、百瀬慎太郎、大町尋常高等小学校（現在の大町市立大町西小学校の前身校）尋常科入学（当時の同校長は河野齢蔵）（6歳） | |
| 1903年 | 明治36年 | 4月、百瀬慎太郎、大町尋常高等小学校（現在の大町市立大町西小学校の前身校）高等科入学（10歳） | 1902年　日英同盟成立 |
| 1904年 | 明治37年 | | 志村烏嶺、自身第1回目となる白馬岳登山で葱平付近で新種2種の植物を採集（ヒメウメバチソウ、シロウマオウギ）<br>1904～05年　日露戦争 |
| 1905年 | 明治38年 | 4月、百瀬慎太郎、長野県立大町中学校（現在の長野県大町岳陽高等学校の前身校）入学（12歳） | 日本山岳会（当時は山岳会）が結成される（初代会長・小島烏水）（東洋初の山岳会）<br>松沢貞逸、白馬岳頂上の測量小屋跡の借地願いの許可を旧営林署から得る |
| 1906年 | 明治39年 | 8月、百瀬慎太郎（13歳）、友人3名とともに、自身初の北アルプス山行となる白馬岳登山。案内は細野の案内人・丸山市三郎<br>百瀬慎太郎、日本山岳会機関誌『山岳』第1年第2号を入手し、以降、購読。また、小島烏水著『日本山水論』を購入。この頃から山に傾倒（13歳か14歳） | 山岳会機関誌『山岳』創刊 |
| 1907年 | 明治40年 | | この頃、前年に白馬岳頂上の測量小屋跡の石室に手を加えた松沢貞逸、本格的に山小屋として開業（白馬頂上小屋。現白馬山荘。北アルプスにおける近代登山者向けの営業山小屋第1号） |
| 1909年 | 明治42年 | 7月、遠山品右衛門の次男・兵三郎、日本山岳会会員・辻本満丸の平～針ノ木峠～爺ヶ岳登山を案内<br>遠山作十郎、東京の鉱山師・中井の爺ヶ岳～立山方面登山を案内<br>7月、百瀬慎太郎、日本山岳会会員・辻村伊助と会う。以来、親交を結ぶ（16歳）<br>8月、百瀬慎太郎、日本山岳会入会（会員番号215番）（16歳） | |

| 西　暦 | 和　暦 | 事　　項 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1910年 | 明治43年 | 1月頃、百瀬慎太郎、旧制第二高等学校（現在の東北大学の前身校。通称「二高」）受験のため宮城県仙台に赴くが、連れ戻される（17歳）<br>3月、百瀬慎太郎、大町中学校卒業（17歳）<br>7～8月、遠山兵三郎、大町の案内人・大西又吉、仁科春吉、宮田栄吉、遠山亀次とともに、日本山岳会会員・三枝威之介、中村清太郎、辻本満丸の鹿島槍ヶ岳～槍ヶ岳縦走を案内。その際、三枝らは遠山品右衛門から道中の様子を聞いているほか、7月21日、黒部川へ向かう品右衛門と作十郎を針ノ木峠の雪上に鳴沢岳頂上から遠望している。また、一行は蓮華岳へコマクサ採りに来た2人組と出会う（1人は大町の案内人・伊藤菊十と思われる） | 加賀正太郎、ユングフラウ登山（日本人初のアルプス4,000 m峰登頂）<br>韓国併合 |
| 1911年 | 明治44年 | 7月、百瀬慎太郎、歌人・若山牧水（本名・繁）門下となる（18歳）<br>8月、遠山作十郎、大町の案内人・大西又吉、勝野玉作とともに、東京帝国大学OB・安倍能成、田辺重治、岩波茂雄ほか2名の裏銀座～立山などの縦走を案内<br>10月、百瀬慎太郎、遠山品右衛門と作十郎の案内で、大町～針ノ木峠～平（1泊）登山（18歳）　※前年1910（明治43）年の可能性もあり | |
| 1913年 | 大正2年 | 7～8月、百瀬慎太郎（20歳）、大町中学校教師・秦四郎とともに（ロシア人商人・アレキサンドル・グーセフと荻御常太郎、その荷担ぎ2人が途中同行）、針ノ木峠～大黒岳縦走。案内は、大町の案内人・伊藤菊十、勝野玉作、傳刀林蔵<br>8月、百瀬慎太郎（20歳）、日本山岳会会員・青木とともに、烏帽子岳～槍ヶ岳縦走（途中、水晶・赤牛往復）。案内は、遠山作十郎と兵三郎、大町の案内人・勝野玉作 | 陸地測量部の北アルプス部分の5万分の1地形図が順次発売される（このほか、鉄道の整備、山小屋の開業、登山案内人組合の発足、学校集団登山の普及、学生山岳部や社会人山岳会といった各種山岳団体の設立などがあいまって、いわるゆ「大正登山ブーム」へ） |
| 1914年 | 大正3年 | 7月、百瀬慎太郎（21歳）、葛温泉～東沢乗越～中房温泉登山。案内は、大町の案内人・大西又吉<br>7月末、百瀬慎太郎（21歳）、知人らとともに、立山～剱岳登山。案内は、大町の案内人・大西又吉、細野の案内人・丸山市三郎<br>7～8月、大町の案内人・傳刀林蔵、荷運び1名とともに、第一高等学校旅行部部員・大木操一らの鹿島槍ヶ岳～剱岳縦走を案内<br>夏、百瀬慎太郎、大阪毎日新聞社員・石川欣一に会う。この年、慎太郎は登山概念図を独自に作成（21歳）<br>12月、百瀬慎太郎、熊井みつると結婚（21歳か22歳） | 第一次世界大戦起こり、ドイツに宣戦 |
| 1915年 | 大正4年 | 7月、大町の案内人・傳刀林蔵、黒岩直吉、荷担ぎ5名とともに、理学博士・一戸直蔵、大阪朝日新聞記者・長谷川如是閑、俳人・河東碧梧桐（本名・秉五郎）の針ノ木峠～烏帽子岳～槍ヶ岳縦走（第2記録）を案内 | 信濃鉄道が松本・北松本間で開通 |
| 1916年 | 大正5年 | | 信濃鉄道が大町まで開通 |
| 1917年 | 大正6年 | 6月、百瀬慎太郎の主唱により、大町登山案内者組合（現大町登山案内人組合）設立（加入者22人）。日本で最初に結成された近代登山の登山案内人の組織団体（24歳）<br>7月、大町の案内人・黒岩直吉、芦峅寺の案内人・佐伯政吉とともに、慶応義塾山岳会会員・斎藤新一郎の別山尾根～剱岳～大窓（三ノ窓～大窓間の初縦走）を案内<br>百瀬慎太郎、長女・美江生まれる（24歳） | 篭川谷大沢出合対岸に石積み置き屋根の大沢石室がつくられる<br>日本初の夏期大学として木崎湖畔に信濃木崎夏期大学が開かれる |
| 1918年 | 大正7年 | 7月、大町の案内人・佐藤静馬、佐藤朝義、勝野寿秋、慶応義塾山岳会会員・伊東弥六、豊辺国臣の鹿島槍ヶ岳～八峰東面・口ノ沢？縦走（初踏破・初下降）を案内<br>7月、大町の案内人・黒岩直吉、ほか2名とともに、慶応義塾山岳会会員・斎藤新一郎の鹿島槍ヶ岳～八峰キレット（稜通しの第2踏破）を案内 | 有明登山案内者組合結成<br>槍沢ババの平に前年建てられたアルプス旅館（後に槍沢小屋、現槍沢ロッヂ）営業開始 |
| 1919年 | 大正8年 | 8月、大町の案内人・佐藤静馬、宮原勇吉、内山忠春、日本山岳会会員・沼井鐵太郎の五龍岳～黒部川東谷下降～棒小屋沢遡行などの登山を案内（八峰から東谷への踏破初記録）<br>8月、信濃博物学会とその姉妹団体である信濃山岳研究会の両団体を母体とし、信濃山岳会（代表・牧伊三郎）が設立。百瀬慎太郎、信濃山岳会の幹事となる（27歳） | 長野県は、増加する登山者の利便と安全のため、県内10ヶ所に石室を設置する方針を決定<br>松沢貞逸の主唱により、白馬山案内人組合が結成<br>常念口登山案内人組合結成<br>常念坊乗越小屋（後に常念小屋）開業<br>四ッ谷登山案内者組合 |
| 1920年 | 大正9年 | 7月、大町の案内人・伊藤菊十、荷運び・倉科智永、西沢国一とともに、竹内鳳次郎、竹内ヒサの鹿島槍ヶ岳～針ノ木峠縦走を案内（女性によるこの間の初縦走）<br>7月、大町の案内人・大西又吉、荷運び4名とともに、日本山岳会会員・田中喜左衛門、ほか1名の黒部川～上ノ廊下初踏破・初下降などを案内<br>7～8月、大町の案内人・北澤清志、荷担ぎ・西沢亀重、清水彦男、細川紀道とともに、竹内鳳次郎、竹内ヒサ、岡田郁之助（ヒサの弟）の黒部横断などを案内（女性初の黒部横断・剱岳登頂）<br>百瀬慎太郎、次女美和生まれる（27歳） | 藤木九三ら、神戸でRCC結成<br>東洋アルミナムが黒部川上流域の開発の優先権を得て測量や開削に着手。黒部渓谷の電源開発開始 |
| 1921年 | 大正10年 | | 燕の小屋（後に燕山荘）開業<br>槇有恒、スイス・アルプスのアイガー東山稜初登攀<br>イギリス隊、エベレストへの遠征登山をはじめる |
| 1922年 | 大正11年 | 5月、百瀬慎太郎、残雪の立山～針ノ木峠越え登山（29歳） | 島々口登山案内者組合結成 |
| 1923年 | 大正12年 | 1月、百瀬慎太郎、東山の乗越スキー場にて講習会を開く（30歳）<br>2月、百瀬慎太郎（30歳）、名古屋の素封家・伊藤孝一と燕山荘開設者・赤沼千尋とともに、大町から針ノ木・立山越え登山を計画し、実行するが、吹雪が続き大沢石室で断念。案内・荷担ぎに大町の案内人・黒岩直吉、北澤清志、ほか大町登山案内人組合組合員13名<br>3月、百瀬慎太郎、伊藤孝一と赤沼千尋とともに、芦峅寺から立山・針ノ木越え（30歳） | 関東大震災<br>西岳小屋（現西岳ヒュッテ）建設<br>長野県が「登山案内人取締規則」公布し、登山案内人に免許を与える<br>大町駅から市街地を経由し高瀬川上流部沿岸の笹平まで、発電所建設用資材運搬のための電気鉄道軌道が完成 |

| 西　暦 | 和　暦 | 事　　項 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1924年 | 大正13年 | 4 月、百瀬慎太郎、槍ヶ岳～黒部五郎岳登山（31 歳） | |
| 1925年 | 大正14年 | 百瀬慎太郎、大沢小屋建設（32 歳）<br>12 月～翌年 1 月、大町の案内人・勝野玉作と有明の案内人・大和由松が、早稲田大学山岳部による第 2 回目となる大沢入りの厳冬期登山（蓮華岳積雪期初登頂、スバリ岳積雪期初登頂）で、大沢小屋の小屋番として同行 | |
| 1926年 | 大正15年 | 6 月、百瀬慎太郎（33 歳）、大阪毎日新聞社員・石川欣一とともに、針ノ木峠～五色ヶ原～立山登山。案内は大町の案内人・北澤清志<br>8 月、百瀬慎太郎、この頃から、石川欣一の紹介で陸軍大学教授・フランス文学者の岡野馨、フランス文学者・山田珠樹を知り、以来、親交を結ぶ（33 歳）<br>百瀬慎太郎、三女・三春生まれる（33 歳） | 槍岳肩の小屋（後に槍岳山荘に改名、現槍ヶ岳山荘）完成 |
| 1927年 | 昭和2年 | 1 月、大町の案内人・勝野玉作と黒岩直吉、有明の案内人・大和由松が、早稲田大学山岳部による第 3 回目となる大沢入りの厳冬期登山（鳴沢岳積雪期初登頂）で、荷担ぎとして途中同行<br>4 月、百瀬慎太郎（34 歳）、槍ヶ岳西鎌尾根行。案内は島々の案内人・大井庄吉<br>6 月、有明の案内人・大和由松、中山彦一と近藤一雄、法政大学の高橋栄一郎、信濃山岳会の土橋荘三による千丈沢から赤岳への登攀を案内<br>11 月、このころから、百瀬慎太郎、仲間とともに、中山の表山に中山スキー場（旧大町スキー場）を開く（34 歳）<br>12 月、鹿島の案内人・宮坂治作、日本山岳会会員・小池文雄、山中金次郎の大冷沢北俣～布引山北の肩～鹿島槍ヶ岳南峰登山を案内<br>12 月、早稲田大学山岳部の部員 11 人、山スキー練習中に篭川谷で雪崩遭難、4 人が命を失う。百瀬慎太郎（35 歳）、この遭難に対し、對山館を捜索本部として慎太郎の弟・孝男が登山案内人らによる捜索の指揮をとり、捜索に尽力。翌年 6 月、全員の遺体を収容する（当時、国内の登山界において前例のない大規模な山岳遭難事故であったとともに、地元の大町においては警察署、消防組、登山案内人組合などが組織的に遭難の救助・捜索活動を行ったはじめての事例といわれる）<br>百瀬慎太郎、四女・美稔生まれる（34 歳） | |
| 1928年 | 昭和3年 | | 平村登山案内人組合設立（加入者 19 名） |
| 1929年 | 昭和4年 | 12 月、大町スキー倶楽部結成。百瀬慎太郎、初代会長となる（36 歳か 37 歳） | |
| 1930年 | 昭和5年 | 7 月、百瀬慎太郎、針ノ木小屋建設（37 歳）<br>7 月、有明の案内人・大和由松、京都帝大旅行部部員・藤田喜衛、工樂英司のスバリ岳西面中尾根登攀（初登）・西尾根主稜登攀（初登）を案内<br>8 月、大町の案内人・黒岩直吉、北澤清志、日本山岳会会員・冠松次郎、京都大学山岳部・渡辺漸、映画撮影隊隊員の鹿島槍ヶ岳東尾根登攀（初登）を案内<br>8 月、有明の案内人・大和由松、東京農業大学山岳部部員・河内嘉吉の赤沢左俣～針峰～赤沢山（初登）登攀を案内<br>12 月、大町の案内人・櫻井一雄、桜井親次、立教大学山岳部部員・堀田弥一、斯波悌一郎、逸見真雄による鹿島槍ヶ岳（厳冬期初登頂）大冷沢北俣鎌尾根（厳冬期初登）登攀を案内<br>百瀬慎太郎、仲間とともに、鷹狩山の西側の中腹に東山スキー場（その後、自然消滅）を開く（37 歳か 38 歳） | 山と溪谷社から山岳雑誌『山と溪谷』創刊<br>大糸線が神城まで開通 |
| 1931年 | 昭和6年 | | 満州事変起こる |
| 1932年 | 昭和7年 | 5 月、大町の案内人・櫻井一雄、同志社大学山岳部部員・児島勘次の鹿島槍ヶ岳東尾根～天狗尾根（初踏破・初下降）登山を案内<br>12 月～翌年 1 月、大町の案内人・櫻井一雄、桜井親次、日本山岳会会員・小池文雄の烏帽子岳～赤牛岳（厳冬期初登）などの登山を案内 | |
| 1933年 | 昭和8年 | 3 月、大町の案内人・櫻井一雄、荷担ぎ 2 名とともに、立教大学山岳部部員・小原勝郎、湯浅巌の鹿島槍ヶ岳天狗尾根登攀（積雪期初登）を案内 | |
| 1934年 | 昭和9年 | 12 月～翌年 1 月、有明の案内人・大和由松、芦峅の佐伯宗作とともに京都大学白頭山（中朝国境上）遠征隊に参加 | 飛騨山脈一帯が中部山岳国立公園に指定される |
| 1935年 | 昭和10年 | 6 月、大町観光協会設立。百瀬慎太郎、松川村出身の教育者・平林武夫らとともに、同協会の幹事となる（42 歳）<br>12 月～翌年 1 月、大町の案内人・櫻井一雄、桜井親次、立教大学山岳部部員・山県一雄ら 13 名の鹿島槍ヶ岳天狗尾根（厳冬期初登）北壁ピークリッジ（積雪期初登）登攀（極地法による登山）案内<br>この頃、大町の案内人・櫻井一雄、ドイツのバイエルン社技師夫妻を黒部などへ案内 | |
| 1936年 | 昭和11年 | 12 月～翌年 1 月、大町の案内人・櫻井一雄が、大沢小屋をベースに針ノ木小屋を使用した立教大学山岳部（ナンダ・コート遠征登山の留守部員）による厳冬期登山（スバリ岳西尾根主稜上部積雪期初下降・積雪期初登、赤沢岳西尾根上部積雪期初下降・積雪期初登）で、荷担ぎとして同行 | 立教大学山岳部、ナンダ・コート初登頂（日本人初のヒマラヤ遠征登山） |
| 1937年 | 昭和12年 | 8 月、百瀬慎太郎、久邇宮三殿下を針ノ木小屋に迎える（44 歳） | 1937 ～ 1945 年　日中戦争<br>1940 年　日独伊三国軍事同盟締結 |
| 1941年 | 昭和16年 | この頃より登山者少なく、大町登山案内者組合は解散状態となる。若い登山案内人たちは戦場へ | 1941 ～ 1945 年　太平洋戦争 |
| 1942年 | 昭和17年 | 6 月、百瀬慎太郎、對山館を廃業する決心をする（49 歳） | |
| 1943年 | 昭和18年 | 6 月、對山館廃業。軍需工場（昭和電工）の寮となる。百瀬慎太郎一家は近くの借家に転居（50 歳） | |

| 西　暦 | 和　暦 | 事　　項 | 備　　考 |
|---|---|---|---|
| 1946年 | 昭和21年 | 7月、新たに大町観光協会ができる。百瀬慎太郎、同会に専従する。これ以降頃から、同協会では大町駅前にて夏山の登山相談所を設置したり、大町登山案内者組合の事務所を兼ねたりするようになる（53歳）<br>9月、大町の案内人・傳刀林蔵、カナダ山岳会会員・ドクトル.カーターの槍ヶ岳～穂高連峰縦走を案内 | 日本国憲法公布 |
| 1947年 | 昭和22年 | 6月、百瀬慎太郎、大町に再疎開中の槇有恒とともに、日本山岳会信濃支部設立に尽力（54歳）<br>百瀬慎太郎長女・美江の長男・堯生まれる（54歳） | 山岳雑誌『岳人』創刊 |
| 1948年 | 昭和23年 | 4月、百瀬慎太郎、日本アルプス山小屋組合の副会長となる（55歳）<br>7月、百瀬慎太郎、戦後初めて大沢小屋を開く（55歳）<br>8月、百瀬慎太郎、戦争中に大破した針ノ木小屋を解体・修理。このころより食物を飲み込むときに障害が出始める（55歳）<br>この頃から、山へ登山者がもどりだす。大町の案内人・櫻井一雄・親次、平林高吉が、登山案内再開 | |
| 1949年 | 昭和24年 | 3月5日、百瀬慎太郎、食道癌にて逝去（享年56歳3ヶ月）<br>6月、大町登山案内者組合の存続決定（組合員11名）。組合長･百瀬勝（慎太郎長女・美江の夫）、副会長・桜井順（実質的な組合長）、幹事・平林高吉 | |
| 1953年 | 昭和28年 | 8月、大町山岳会、石川欣一、槇有恒らにより、大沢小屋前の岩に記念レリーフが設置される | イギリス隊、エベレスト初登頂（登頂者はエドモンド・ヒラリーとテンジン・ノルゲイ） |
| 1954年 | 昭和29年 | | 大町市誕生（1町3村合併） |
| 1955年 | 昭和30年 | 昭和30年代に入り、登山道・山小屋・登山装備の充実、ガイドレス登山、近代的ガイドへ変身 | |
| 1956年 | 昭和31年 | | 日本山岳会､マナスル初登頂（「戦後の登山ブーム」へ）<br>国際連合加盟成る<br>北アルプス遭難対策会設立 |
| 1957年 | 昭和32年 | 大町山岳会により、百瀬家や関係者を招いての慎太郎を偲ぶささやかな会が、大沢小屋前で催される | 松本・糸魚川間の大糸線が全線開通 |
| 1958年 | 昭和33年 | 大沢小屋前で第1回「慎太郎祭」開催（以後、主催や会場などの改変を経て毎年開催。現在、針ノ木岳慎太郎祭として6月第1日曜日開催） | 大町トンネル（現関電トンネル）貫通<br>北安曇登山案内人組合設立<br>長野県山岳遭難防止対策協議会設立 |
| 1961年 | 昭和36年 | 大町登山案内者組合の組合長に丸山充嘉が就任 | |
| 1962年 | 昭和37年 | 8月、百瀬慎太郎遺稿集刊行会により、『山を想へば』が発行される | |
| 1963年 | 昭和38年 | 大町登山案内者組合の組合員18名 | 黒部ダム完成<br>北アルプス登山案内人組合連合会設立 |
| 1964年 | 昭和39年 | 大町登山案内者組合の組合長に古川潔が就任 | 全日本山岳連盟、ギャチュンカン初登頂（日本山岳会以外の社会人山岳会による日本最初期の海外遠征登山での登頂成功） |
| 1965年 | 昭和40年 | 夏山シーズンに北アルプス北部の常駐隊のパトロール初めて実施 | |
| 1966年 | 昭和41年 | 大町登山案内者組合の組合長に芝波田一美が就任 | |
| 1970年 | 昭和45年 | | 日本山岳会、エベレスト登頂（日本人初のエベレスト登頂(世界第6登)） |
| 1971年 | 昭和46年 | | 立山黒部アルペンルート全線開通 |
| 1987年 | 昭和62年 | 大町山岳会により、針ノ木岳慎太郎祭30周年を記念して大沢小屋前の岩に慎太郎肖像レリーフと略歴プレートが設置される | |
| 1994年 | 平成6年 | 大町登山案内者組合、規約を改正、大町登山案内人組合に改称して再スタートを切る（組合員21名） | この頃から、「深田久弥選 日本百名山 登山」ブームはじまる |
| 1997年 | 平成9年 | 11月、大町登山案内人組合創立80周年記念式典開催 | |
| 1998年 | 平成10年 | 大町登山案内人組合創立80周年記念誌『岳とともに 先達』刊行（組合員36名） | 長野冬季五輪 |
| 1999年 | 平成11年 | 大町登山案内者組合の組合長に狩野正明が就任 | |
| 2002年 | 平成14年 | | 大町市「山岳文化都市宣言」 |
| 2006年 | 平成18年 | | 大町市と安曇郡八坂村・美麻村による1市2村合併 |
| 2008年 | 平成20年 | 2月、大町登山案内人組合創立90周年記念式典開催（組合員40名） | 2009年頃から、「山ガール」ブーム起こる<br>2011年　東日本大震災。東電福島第一原発事故 |
| 2014年 | 平成26年 | | 長野県が独自の「信州山の日」制定（7月第4日曜日） |
| 2016年 | 平成28年 | | 国民の祝日「山の日」が設けられる（8月11日） |
| 2017年 | 平成29年 | 11月､大町登山案内人組合創立100周年記念式典開催予定（組合員35名） | |

注　ここでは、百瀬慎太郎及び大町登山案内人組合に関して、主な出来事や登山記録などを記した。なお、（　）内に記載した百瀬慎太郎の年齢はその時点での満年齢を示した。備考欄には同時代の出来事から関係する主な事項などを参考までに記した。この年表は、市立大町山岳博物館編『對山館と百瀬慎太郎 岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る』（市立大町山岳博物館、2002）掲載の「對山館と百瀬慎太郎 主要年表」、市立大町山岳博物館編『北アルプス 山人たちの系譜 ―嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景―』（市立大町山岳博物館、2007）掲載の「関係略年表」の内容をもとにし、別掲の文献を参考にして作成した。

# 主要参考文献


（全体共通）

市立大町山岳博物館編『對山館と百瀬慎太郎　岳都大町に花開いた登山文化の原点を探る』（市立大町山岳博物館、2002）
市立大町山岳博物館編『北アルプス 山人たちの系譜 ―嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景―』（市立大町山岳博物館、2007）
市立大町山岳博物館編『山と人 北アルプスと人とのかかわり ―人文科学系 展示解説書―』（市立大町山岳博物館、2014）

第１章　日本近代登山の幕開け

B･H･ チェンバレン／ W･B･ メイスン共編『日本旅行案内』 第７版（ジョン・マレー社、1907）
Walter Weston 著「OF THE ORIGIN OF THE TERM“THE JAPANESE ALPS.”」『山岳』第 13 年第２号（日本山岳會事務所、1919）
岩間正夫編『世界山岳百科事典』（山と溪谷社、1971）
ヴィクター・ハリス／後藤和雄編『WILLAM GOWLAND　THE FATHER OF JAPANESE ARCHAEOLOGY　ガウランド 日本考古学の父』（大英博物館出版部・朝日新聞社、2003）
イアン・C. ラックストン著／長岡祥三・関口英男訳『東西交流草書 10　アーネスト・サトウの生涯 ―その日記と手紙より―』（雄松堂出版、2003）
関悟志著「山博ゼミ 41・42　明治前後の外国人登山者（前・後）」（2003 年 12 月 13 日・20 日付「大糸タイムス」）
造幣局あゆみ編集委員会編『造幣局のあゆみ 改訂版』（独立行政法人造幣局、2010）

小林計一郎著『渡辺敏先生傳』（小林計一郎、1951）
長沢武著『北アルプス夜話』（信濃路、1977）
信濃毎日新聞社出版部編『長野県スポーツ史』（信濃毎日新聞社、1979）
大町市史編纂委員会編『大町市史』第５巻 民俗・観光（大町市、1984）
大町市史編纂委員会編『大町市史』第４巻 近代・現代（大町市、1985）
渡辺敏全集編集委員会編『渡辺敏全集』（長野市教育会、1987）
荒井和比古著「一幅の掛軸をめぐって―渡辺敏と白馬岳―」『第 13 回山小屋カルチャー報告書』（早稲田大学岳友会、2004）
『目で見る日本登山史』（山と溪谷社、2005）
富山県 [ 立山博物館 ] 編『富山県 [ 立山博物館 ] 平成 17 年度特別企画展　ちょっと昔の学校登山 ―写真でたどる大正･昭和の立山登山―』（富山県 [ 立山博物館 ]、2005）
関悟志著「「顕彰碑にみる人物登山史」シリーズ　第３回　渡邊敏」日本山岳文化学会登山史分科会編『登山史分科会レポート』No.12（日本山岳文化学会登山史分科会、2013）

岡野金次郎著「小島と私 ―初期の登山とウェストンとの交友とのことなど―」『山岳』第 44 年第１号（日本山岳會、1949）
近藤信行著「解題・解説」小島烏水著『小島烏水全集』第４巻（大修館書店、1980）
小島烏水著「槍ヶ岳の昔話 ―志賀矧川とウエストン」小島烏水著『小島烏水全集』第９巻（大修館書店、1981）
山崎安治著「9　日本山岳会の設立」『新稿 日本登山史』（白水社、1986）
ウォルター・ウェストン著／岡村精一訳『平凡社ライブラリー 94　日本アルプス 登山と探検』( 平凡社、1995)
ウォルター・ウェストン著／水野勉訳『平凡社ライブラリー 161　日本アルプス再訪』( 平凡社、1996)
関悟志著「山博ゼミ 61　日本中央大山系横断記」（2004 年７月 31 日付「大糸タイムス」）
『目で見る日本登山史』（山と溪谷社、2005）

市立大町山岳博物館編『北アルプスの自然と人 市立大町山岳博物館展示案内』（市立大町山岳博物館、2005）
柳澤昭夫著「鹿島槍ヶ岳の積雪期登攀とアルピニズム ―大正末から昭和初期の鹿島槍登山―」市立大町山岳博物館編『企画展「アルピニズム誕生昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史」』（市立大町山岳博物館、2009）
飯田年穂著「近代アルピニズムの誕生とその文化 ―スポーツとしての登山―」『山岳文化』第 11 号（日本山岳文化学会、2010）
スイス政府観光局・市立大町山岳博物館編『スイス山岳観光の黄金期と日本人 ―その魅力と文化を伝えた人々―』（市立大町山岳博物館、2012）

第２章　大町登山案内人組合の誕生

峯村隆著「對山館の時代とは何だったのか（前・後）市立大町山岳博物館編『山と博物館』第 47 巻第９・10 号（市立大町山岳博物館、2002）
峯村隆著「歌に読む百瀬慎太郎の心情（前・後）」市立大町山岳博物館編『山と博物館』第 49 巻第２・３号（市立大町山岳博物館、2004）
関悟志著「大町登山案内者組合のはじまり（前・後）」市立大町山岳博物館編『山と博物館』第 49 巻第３・４号（市立大町山岳博物館、2004）

百瀬慎太郎遺稿集刊行会編『山を想へば』（百瀬美江、1962）
槇有恒著「思い出の日々」『わたしの山旅』（岩波書店、1968）
大町市史編纂委員会編『大町市史』第４巻近代・現代（大町市、1985）
針ノ木岳慎太郎祭 50 周年記念誌刊行部会編『針ノ木岳慎太郎祭 50 年の歩み』（針ノ木岳慎太郎祭実行委員会、2007）
関悟志著「百瀬慎太郎」『顕彰碑に見る人物登山史』（日本山岳文化学会、2011）

「大町登山案内者組合の設立」『山岳』第 12 年第１号 ( 日本山岳會事務所、1918)
「雑録 登山案内者（一）大町登山案内者組合」『山岳』第 13 年第１号 ( 日本山岳會事務所、1918)
百瀬慎太郎遺稿集刊行会編『山を想へば』( 百瀬美江、1962)
荒井今朝一著「大町口登山案内人抄録 ―その 2―」『山と博物館』第 20 巻第１号 ( 大町山岳博物館、1975)
瓜生卓造著『おおまち物語』( 山と溪谷社、1976)
中村周一郎著『北アルプス開発誌 山小屋創始者と山案内人烈伝』（郷土出版社、1981）
『信州人物風土記・近代を拓く 第 14 巻 山を想へば／百瀬慎太郎』（銀河書房、1989）
佐藤貢氏旧蔵資料（市立大町山岳博物館）

伊藤孝一著『狸囃子（上・下)』（1951）
赤沼千尋著『山の天辺』（東峰書房、1975）
布川欣一著「趣味の登山がアルピニズムを超えたとき ―伊藤孝一没後五十周年に―（前･後）」市立大町山岳博物館編『山と博物館』第 49 巻第 9･10 号（市立大町山岳博物館、2004）
富山県 [ 立山博物館 ] 編『富山県 [ 立山博物館 ] 平成 16 年度企画展　山嶽活寫 大正末、雪の絶巓にカメラを廻す」（富山県 [ 立山博物館 ]、2005）
大町山岳博物館著「山岳映像企画 2004 報告」市立大町山岳博物館編『山と博物館』第 50 巻第４号（市立大町山岳博物館、2005）

柳原修一著『北アルプス山小屋物語』（東京新聞出版局、1999（第４刷））
大町市史編纂委員会編『大町市史』第５巻民俗・観光（大町市、1984）
関悟志著「山博ゼミ⑥　昔の山小屋に泊まる」（2003 年４月 12 日付「大糸タイムス」）

大町市史編纂委員会編『大町市史』第３巻 近世（大町市、1986）
菊地俊朗著『北アルプス この百年』（文藝春秋、2003）
『日本登山史年表』（山と溪谷社、2005）
市立大町山岳博物館編『よみがえる 高嶺の草花 ―志村烏嶺 旧蔵植物標本― 近代日本登山の先駆者が遺した山の宝物』（市立大町山岳博物館、2007）
スイス政府観光局・市立大町山岳博物館編『スイス山岳観光の黄金期と日本人 ―その魅力と文化を伝えた人々―』（市立大町山岳博物館、2012）
大町市教育委員会編『ふるさと　きのう・きょう・あした ―わたしたちの大町―』新訂第４版（大町市教育委員会、2015）

第３章　岳都おおまち

『世界山岳百科事典』（山と溪谷社、1971）
信濃毎日新聞社編『信州山岳百科 Ⅰ』（信濃毎日新聞社、1983）
『日本の山岳標高一覧 ―1003 山―』（国土地理院、1991）
信濃毎日新聞社編集局編『北アルプス 下』（信濃毎日新聞社、1992）
大町市編『大町市統計要覧 2008　平成 20 年版』（大町市）

# 謝　辞

企画展にあたり、下記の皆様方から、貴重な写真や資料、情報のご提供など、多大なご協力・ご教示を賜りました。
ここにご芳名を記して、心より深く感謝の意を表すとともに、厚くお礼申しあげます。

百瀬　堯　　黒岩俊夫　　北澤紀男　　倉科　琴
大和重男　　櫻井幸雄　　櫻井松子　　平林秀一
大町市観光協会　　大町市文化財センター

（順不同、敬称略）

市立大町山岳博物館／大町登山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会　共同企画展
大町登山案内人組合創立100周年記念

**北アルプスの百年　百瀬慎太郎と登山案内人たち**

発行日　2017(平成29)年8月5日
編集　市立大町山岳博物館
大町登山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会
発行　市立大町山岳博物館
〒398-0002　長野県大町市大町8056-1
TEL：0261-22-0211／FAX：0261-21-2133
E-mail：sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL：http://www.omachi-sanpaku.com
印刷・製本　株式会社奥村印刷所
〒398-0002　長野県大町市大町2470
TEL：0261-22-0205／FAX：0261-22-1345

©Omachi Alpine Museum　2017　Printed in Japan

# 大町登山案内人組合創立100周年

## ～登山ガイドグループの先駆け。その100年の歴史を振り返る～

今から約１世紀前、大正初期になると、北アルプス部分の正確な地図が発行されたり、山麓地域まで鉄道が延伸したり、さらに次々と山小屋が建設されたことなどで、夏山の登山者が急激に増加しました。北アルプスへの登山口である信州・大町にも多くの登山者が訪れました。時代は、いわゆる大正登山ブームを迎えます。しかし、当時の登山はまだまだ危険を伴う野営により道筋を探しながらの探検的な登山が主でした。そのため、実際に登山を行うには、山の地理に精通し、山中での暮らしに熟達した案内人の存在が不可欠でした。

こうした時代の要請を敏感にとらえたのが、大町にかつてあった旅館・對山館の百瀬慎太郎（1892～1949年）でした。慎太郎が主唱し、1917（大正6）年6月、大町登山案内者組合（現大町登山案内人組合）が大町で設立されました。これは当時、急増していた登山者の要望に応えるとともに地元登山案内人の資質向上を目指してのことで、こうした動きは全国に先駆けてのことでした。

OMACHI ALPINE MUSEUM

市立 大町山岳博物館

2017